

【調査・事業報告】

文学散歩という方法 — 漱石文学散歩の記録 —

行 吉 正 一*、田 中 実 穂*

目 次

はじめに

1. 文学散歩について

- (1) 漱石文学散歩
— 新聞小説の舞台を歩く —
- (2) 野田宇太郎の文学散歩
- (3) 他館の文学散歩
- (4) 文学散歩についての考察

2. 漱石文学散歩の記録

- (1) 漱石文学散歩の実施
- (2) 漱石文学散歩 第1回 『三四郎』
- (3) 漱石文学散歩 第2回 『それから』
- (4) 漱石文学散歩 第3回 『門』
- (5) 漱石文学散歩 第4回 『彼岸過迄』
- (6) 漱石文学散歩 第5回 『行人』
- (7) 漱石文学散歩 第6回 『ころも』

おわりに

漱石文学散歩地図

キーワード 文学散歩 夏目漱石 新聞小説 東京 野田宇太郎

はじめに

東京都江戸東京博物館は、失われつつある江戸東京の歴史遺産を守るとともに、江戸東京の歴史と文化をふりかえることによって未来の東京を考える博物館として1993年（平成5）に開館した。その「歴史と文化」の中には文学も当然含まれ、当館では、文学関係資料の収集、管理、展示を行っているが、文学講座や文学散歩などの教育普及事業も展開している。ここで報告する、漱石文学散歩は、その教育普及事業の一環として行ったものである。漱石文学散歩は、夏目漱石の前期三部作（『三四郎』、『そ

*東京都江戸東京博物館学芸員

れから』、『門』) および後期三部作 (『彼岸過迄』、『行人』、『ころ』) の舞台となった東京都内を歩くというもので、2001年 (平成13) から2009年 (平成21) まで、一年に一作ずつ行ってきた。(ただし、2004年 (平成16) から2006年 (平成18) までの3年間は中断した。)

2009年 (平成21)、全6回にわたって行ってきた漱石文学散歩が終わり、その記録をここに報告することとする。また、文学散歩を行ったことにより、文学散歩について、その意義や課題を改めて考えることになり、それらについても述べることとする。

第一章の「文学散歩について」では、漱石文学散歩の趣旨について述べ、また、文学散歩を始めた文学者、野田宇太郎の文学散歩観を概観する。さらに、東京都内で文学散歩を行っている文学館3館 (田端文士村記念館、世田谷文学館、町田市民文学館ことばらんど、) に、各館における文学散歩の現状をうかがったので、その様子も紹介する。そして、最後に、博物館にとって、あるいは文学研究にとって、文学散歩はどのような意義があるか、どのような課題があるかについての考察を記す。この第一章は、行吉正一が執筆した。

第二章「漱石文学散歩の記録」は、全6回にわたって行った漱石文学散歩の記録である。講義で話した内容および散歩で紹介した場所の概要を記し、散歩で歩いたコースの地図も付す。第二章は、田中実穂と行吉正一が執筆した。

1. 文学散歩について

(1) 漱石文学散歩 —新聞小説の舞台を歩く—

夏目漱石は、1867年2月9日 (慶応3年1月5日)、江戸の牛込馬場下横町 (現・東京都新宿区喜久井町1番地) で生まれ、1916年 (大正5) 12月9日に、牛込区早稲田南町7番地 (現・新宿区早稲田南町7番地) で亡くなった日本近代を代表する小説家である。20歳代の後半から30歳代の後半までの約8年間、愛媛県松山市、熊本県熊本市、そして、イギリスのロンドンに居住するが、それ以外は東京都の文京区および新宿区に居住した。また、その作品も多くが東京を舞台としており、漱石と東京の関わりは深い。漱石を「東京の作家」と呼ぶこともできるであろう。

そのような漱石についての文学散歩は、作品の舞台となった場所、および、居住した場所を中心に行うことになり、漱石の作品を鑑賞し、漱石の実人生を学ぶものとなった。

一般に、文学散歩を行う場合、文学作品の舞台となった場所を歩く場合と、文学者の実人生に関わりのある場所 (居住したり、旅行したりした場所) を歩く場合とがあるが、漱石の場合は、作品の舞台の面でも、実人生の面でも、双方、東京と関係があり、漱石は、東京文学散歩には、いわば、うってつけの作家ということができる。

今回の漱石文学散歩は、作品ごとに行い、作品の舞台を歩くことに重点を置いたが、それは、漱石の場合、作品の舞台を実際に歩く散歩が可能になる、ある大きな理由があったからである。それは、この漱石文学散歩でとりあげた小説が、すべて新聞に掲載された新聞小説であったということである。

では、なぜ新聞小説であることが、文学散歩に適していたのか。

日本の新聞は、近代になり、欧米の形態をまねてできあがったものであるが、明治時代には最大のマスメディアであった。多くの新聞が発刊され、特に、日清、日露戦争の戦争報道を通じて、各紙は発行部数を伸ばしていった。しかし、戦争が終わると新聞の商品価値は落ち、新聞各社は、大きな経営難に陥る。このような状況において、各紙は、知的読者層を新たにつかんでゆくことをめざし、その中心的な商品の一つとして小説を位置づけ、小説欄の充実につとめていった。新聞小説を連載することにより、毎日、新聞を読む動機とさせ、新聞購読の部数を上げようとしたのである。

ちょうど、そのころ、漱石は、東京帝国大学などで英文学を教えるかたわら、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』を文芸雑誌「ホトトギス」に連載し、それらが大変な好評を博していた。朝日新聞社および読売新聞社は、そこに目をつけ、自社専属の新聞小説作家にすべく漱石獲得にのりだす。結局、朝日新聞社が漱石を獲得することとなり、漱石は、1907年（明治40）、4年間勤めていた東京帝国大学などを辞め、朝日新聞社に入社することとなった。その年の5月3日には、「入社の際」を朝日新聞紙上に発表し、エッセー「文芸の哲学的基礎」を5月4日から6月4日まで27回にわたって掲載する。そして、連載新聞小説の最初の作品として『虞美人草』を6月23日から10月29日にかけて発表する。それ以降、漱石の小説、エッセーは、すべて、朝日新聞に掲載される。漱石の書いたものは、朝日新聞社が独占的に掲載するというのが、朝日新聞社入社の際の条件であったのである。

朝日新聞社に入社したとき、漱石は40歳、妻と4人の子供がいた。また、国費を受けてのイギリス留学を終え、最高学府の東京帝国大学などで教える身分であった。そのような漱石が、その職を辞し、新たに新聞社の専属作家になるということについては、相当慎重になったようで、事実、読売新聞社からの誘いには、将来の保証の点で不安があったため断っている。朝日新聞社との交渉はどうだったのか。その交渉の様子が、漱石の書簡に残っている。

拜啓先日御話しの朝日入社につき多忙中未だ熟考せざれども大約左の如き申出を許可相成候へば進んで池辺氏と会見致し度と存候

一 小生の文学的作物は一切を挙げて朝日新聞に掲載する事

一 但し其分量と種類と長短と時日の割合は小生の随意たる事。（換言すれば小生は一年間に出来得る限り感興に応じ又思索の暇を見出して凡てを朝日新聞に致す事。但しもとより文学的の述作故に器械的に時間を限る能はず。小説杯にても回数を受合ふ訳に行かず。時には長くなり又短くなり。又は一週に何度もかき又は一月に二度しか書かぬ事あるべし。而して小生のやり得る程度は自己にも分らぬ故先づ去年中に小生がなし得たる仕事を以て目安とせば大差なからんかと存候尤も去年の仕事は学校へ出た上の事故専門に述作に従事せば或は量に於多少の増加を見るに至るべきかなれどまず標準はあの位と御考ありたし。而して小生の仕事の過半は無論美文ことに小説にあらはるべきかと存候。（或は長きものを一回にて御免蒙るか又は坊ちやんの様なものを二三篇かくか其辺は小生の随意とせられたし）

一 俸酬は御申出の通り月二百円にてよろしく候。但し他の社員並に盆暮の賞与は頂戴致し候。是は双方合して月々の手宛の四倍（？わからず）位の割にて予算を立て度と存候

一 もし文学的作物にて他の雑誌に不得已掲載の場合には其都度朝日社の許可を得べく候。(是は事実として殆んどなき事と存候。既に御許可のホト、ギスと雖ども入社以後は減多に執筆はせぬ覚悟に候)

一 但し全く非文学的ならぬもの(誰が見ても)或は二三頁の端のもの、もしくは新聞に不向なる学説の論文等は無断にて適当な所へ掲載の自由を得度と存候

一 小生の位地の安全を池辺氏及び社主より正式に保証せられ度事。是も念の為めに候。大学教授は頗る手堅く安全のものに候故小生が大学を出るには大学程の安全なる事を希望致す訳に候。池辺君は固より紳士なる故間違なきは勿論なれども万一同君が退社せらる、時は社主より外に条件を満足に履行してくれるものなく又当方より履行を要求する宛も無之につき池辺君のみならず社主との契約を希望致し候。

必竟ずるに一度び大学を出で、野の人となる以上は再び教師杯にはならぬ考故に色々な面倒な事を申し候。猶熟考せば此他にも条件が出るやも知れず。出たらば出た時に申上候が先ず是丈を参考迄に先方へ一寸御通知置被下度候先は右用事迄 早々頓首

これは、1907年(明治40)3月11日に、漱石が、朝日新聞社と漱石の仲介をしていた白仁三郎(坂元雪鳥)(1879-1938)に宛て書いた書簡である。朝日新聞社と漱石との交渉の最終段階のもので、給与の面、将来の保障の面、そして、作品の内容の面にわたって基本的な条件を交渉していることがわかる。

このように慎重な交渉の結果、朝日新聞社に入社した漱石は、小説を年に一作品、随筆を年に一、二作品、朝日新聞に掲載してゆくことになる。それは、漱石が亡くなるまで続き、漱石は9年間、朝日新聞社に在籍した。

また、漱石が朝日新聞社に入社した1907年(明治40)という時期についていえば、この年は、ちょうど、きりのいい年でもあった。というのは、漱石は、文部省からの辞令により、官費でイギリスに約2年間留学し、帰国後は、東京帝国大学、第一高等学校で教授する義務を負っていたが、その期限が切れるのが、4年間勤めた後の1907年(明治40)3月だったのである。漱石は、この時期を機に、大学を辞め執筆活動に専念すべく朝日新聞社に入ったのである。なお、イギリス留学での成果でもある『文学論』を同年5月に出版し、漱石は、イギリス留学についての国家への責任を名実共に果してもいる。

さて、新聞に掲載した漱石の作品についてであるが、新聞社にとって、漱石といえども、その作品は、読者獲得の手段、商品であり、読者を引き付けない作品では意味をなさない。また、読者から見放されてしまえば、漱石とて朝日新聞社にいつまでも在籍できるわけではない。漱石は、自分の小説が、読者獲得の商品であることを十分に意識して作品執筆に臨んでいる。現在、漱石の作品を読む場合、それが、新聞連載小説とは全く意識しないで読むが、新聞連載小説の基本的条件はしっかりと押さえているのである。

では、その連載新聞小説の具体的な条件とは何か。坪内逍遙(1859-1935)は、1890年(明治23)1月の読売新聞に2回にわたって新聞小説論を掲載している。そして、その最後に、「新聞の小説の要領」として次の5つを挙げている。

- 第一 小説にも当世の事情を報道するの意を含ませ、成るべく当世を本尊とし現在の人情風俗又は傾き等をしめすべし。
- 第二 誰が見ても同感し得べき事、さなくとも多数の人に解る事、即ち楽屋落ちにならぬやうにすべし。
- 第三 親子兄弟並びて読むとも差仕なきやうに。
- 第四 過去の事又ハ未来の事を種とせば成るべく当世と異なる点を今の人に知らしむるやうに。
- 第五 所詮娯ましむると同時に当世の有様を報道するか然らざれば多少教へ導く心ありたし。

新聞小説には、時事性、一般性、健全性、娯楽性、教訓性などが必要であることをわかりやすく説いている。新聞小説は、実験的、前衛的な試みより、社会性を保ったものであるべきことを述べているのである。

もっとも、これは、漱石が、朝日新聞社に入る20年近く前の記事であり、漱石が、この坪内逍遙の記事を読んでいたとは限らないが、漱石の新聞小説も、この逍遙が挙げた、新聞小説は、一般社会性を保つべきだという考えを引き継いで、新聞の読者を十分に意識しての作品になっている。当時の社会のなかで無理なく受容されるような形式と内容を保っているのである。漱石の作品を読むと次のような条件のもと、小説を書いていることがわかる。『三四郎』を例に取ってみよう。

①心理描写より行動や会話を多くする。

新聞小説が読まれるのは、静かな場所ばかりではなく、家族のいる茶の間や電車の中、あるいは、休み時間の会社など、騒々しい場所でもある。そのような環境の中では、緻密な心理描写などばかりが連続しては読者は読む意欲を失ってしまう。行動の描写や会話を多くする必要があるのである。『三四郎』の場合は、三四郎と仲間たちの会話が多く、当時の学生たちの会話や行動を楽しむことができるようになっている。

②登場人物は少なくする。

新聞小説は、毎日、断続的に読むものである。多くの人物が登場すると、読者は途中でそれらの人間関係を追えなくなってしまい、新聞小説を読むことを放棄してしまう。登場するのは主要な人物だけに抑えるのが、新聞小説の必要条件となる。『三四郎』でも、主要な人物は数人だけとなっている。

③同時代性を持つ。

小説の舞台を現在に設定するということである。そうすることにより、同時代の風俗やニュースなどを織り込むことができ、読者をより強く引き付けられるのである。『三四郎』は、同時代の東京帝国大学の学生たちの物語であるが、当時、増えてきていた地方から東京に出てくる学生たちの風俗、東京の繁華な市街地、団子坂の菊人形、上野の展覧会など、同時代の東京の紹介にもなっており、東京の人々はその間に共感を持ち、また、地方の人々にとっては、一種の東京案内にもなっている。

④地域性をもつ。

物語が展開される場所も、遠い知らない国であるよりも、自国の物語であるほうが、読者にはわかりやすい。それも架空の場所ではなく、具体的な場所であれば、読者は一層親近感を持つ。漱石の新聞小

説には、実際の地名が使われており、特に東京が舞台となっていることが多い。東京の多くの読者を考慮してのことなのである。

しかし、漱石の作品には、関西地方など、東京以外の地域も出てくる。これは漱石の小説が東京朝日新聞だけでなく大阪朝日新聞にも連載されており、関西にも読者がいたことから、関西も小説の舞台としているのである。当時の朝日新聞の小説は、東京朝日新聞だけか、あるいは、大阪朝日新聞だけかに連載され、双方に掲載されたのは漱石の作品だけであった。漱石は、読者へのサービスとして、関西の地名も小説の中に入れていたのである。

『三四郎』の場合は、東京帝国大学のある本郷近辺の地名が数多く出てくるが、東京以外の地域の地名も出てくる。三四郎は、熊本の高等学校を卒業したという設定であり、九州から鉄道で広島、名古屋を経て、途中、富士山を見、新橋に着くという行程も描かれている。

ちなみに、なぜ漱石の小説だけ、東京と大阪の朝日新聞に掲載されたか。それには、次のような理由がある。それは、漱石を朝日新聞社に入れようとしたのが、もともと大阪朝日新聞社の鳥居素川（1867-1928）であったということである。鳥居素川の意向を受け、漱石が住む東京の東京朝日新聞社が、漱石と交渉したのであって、本来、漱石は大阪朝日新聞社に入るはずであったが、漱石は、関西に移住する意志がなく、東京朝日新聞社に入ったのであった。そのようなことで、漱石の小説は、例外的に大阪朝日新聞にも掲載され、そのことを意識して、漱石は、関西の地名も小説の中に登場させているのである。

⑤季節感を持つ。

新聞小説は、一日一日と連続して掲載され、連載の始まりと終わりの時期には、季節がいくつか進むことになる。したがって、理想を言えば、物語の展開する季節と、実際にその小説が新聞に掲載される季節が合致すると、季節感を味わいながら読むことができる。むろん、それは、なかなか難しいことであるが、『三四郎』では、それを上手にこなしている。連載の開始は9月1日であったが、『三四郎』は、三四郎が大学に入学すべく汽車で上京する車中の場面から始まっている。当時の大学は9月に始まっていたことから、三四郎が新学期、東京に上京する場面から始めたのである。そして、物語が進行するにつれて、秋が深まり、団子坂の菊人形の催しが紹介され、連載は12月29日で終わるのだが、物語も冬に終わるようになっている。

以上のように、新聞小説には、読者の関心を引き、新聞を購読させるような、様々な工夫が必要なのであるが、漱石はこのような条件をよく理解し、その条件のもとで小説を書いていった。そして、特に、③の同時代性と、④の地域性という条件によって、漱石の新聞小説には、当時の東京の様子が、たとえフィクションであるとはいえ、具体的に表現されることになった。そのようなことから、漱石の小説の舞台となった場所を歩くという文学散歩が可能になったのである。

(2) 野田宇太郎の文学散歩

①野田宇太郎

「文学散歩」という言葉は、いつごろからあるのであろうか。現在では、かなり一般的な言葉になっていると聞いていいこの言葉は、実は野田宇太郎という文学者が意図的に作った言葉である。

野田宇太郎（1909年（明治42）－1984年（昭和59））は、福岡県三井郡立石村大字松崎（現・福岡県小郡市松崎）に生まれた詩人、編集者、文芸評論家である。

野田宇太郎は、まず詩人として文学活動を始めた。1930年（昭和5）には、福岡県久留米市の同人誌「街路樹」に詩を発表、1936年（昭和11）には、丸山豊（1915-1989）らと同人誌「糧」（のち「抒情詩」と改題）を創刊した。詩集として『北の部屋』（1933）、『旅愁』（1942）などを出し、叙情的な作品を残した。

1940年（昭和15）、上京して以降は、文芸誌「新風土」「新文化」「文藝」^{げいりんかんぼ}、「藝林閒歩」などの編集に携わる。

また、文芸評論の活動も行い、『パンの会－近代文藝青春史研究－』（六興出版社 1949）、『日本耽美派文學の誕生』（河出書房新社 1975）、『日本の文学都市』（文林書房 1961）などを著している。

そして、1951年（昭和26）から「日本読書新聞」に「新東京文学散歩」を連載し、「文学散歩」という言葉の創始者となる。この連載をまとめた『新東京文学散歩』（日本読書新聞 1951）はベストセラーとなり、以降、30年余にわたり「文学散歩」は、野田のライフワークとなる。日本全国を回って書いた「文学散歩」シリーズは全24巻、別巻3巻となった。

また、文学風土の保存という観点から、藤村記念館（岐阜県中津川市馬籠）、文京区立鷗外記念本郷図書館（東京都文京区千駄木）、明治村（愛知県犬山市内山）の建設や、数々の文学史跡の記念保存に力を尽したことも特筆すべき業績である。

出身地の福岡県小郡市には、1987年（昭和62）、野田宇太郎文学資料館が開館し、野田宇太郎の蔵書や関連資料が保存公開され、野田宇太郎に関する研究が行われている。

②野田宇太郎の文学散歩観

野田宇太郎の文学散歩についての最初の著作は、『新東京文学散歩』（日本読書新聞 1951年6月25日）である。1951年（昭和26）「日本読書新聞」に連載したものを加筆訂正し出版したもので、装幀は恩地孝四郎、挿絵は織田一磨が描いている。

この『新東京文学散歩』の「序」には、野田宇太郎の文学散歩観がよく現れている。

足で書く近代文学史——と、そんな大それた考えを抱いていたわけでもなく、また私にそれが書けると思っていたわけでもなかったが、新東京文学散歩という漫然とした気持で焼け跡の東京を歩いているうちに、一つの事跡は他の事跡に自然につながってゆき、いつしかそれは近代文学史の形に似て来るのを私は知った。（中略）概念的で概論的な近代文学史ばかりがいくら類を増しても、それは決して真の文学史をより正確に刻むことにはならないし、却って過誤を後世に遺す結果となる場合が多い。詩人や作家の価値をたまたま文字の上に表れたことのみで評価することは、ややもすればその商品価値で芸術を評価するようなことにも成り勝ちである。先ずその人間を知らねばならない。人間を知るためにはその自然と環境をも知らねばならない。私生活を理会せねばその文学を本当に理会することは出来ない。東京こそは、実に近代文学史上に名を刻んだ殆どすべての人々の私生活の場であった。だから、東京を知らずしては近代文学の真実に触れることは出来ない。——と私は考えた。

文学作品を評価するためには、文学作品のみでなく、その作品を書いた作者自身のこと、そして、その作家の生きた自然と環境を知る必要があるという考えである。言語による文学作品を理解するためには、作家自身とその作家をとりまく「自然と環境」つまり地理や歴史を理解しなければならないと考えていたわけで、そこから必然的に、作品や作者にゆかりの土地を歩くという「文学散歩」の必要性が生まれてきたのである。

ところで、このような考え方に接すると、自然と思い浮かばれるのが、1930年代、アメリカやイギリスで起こった文学理論、新批評（ニュー・クリティシズム）である。作品を批評するに際し、作家の伝記や時代的背景を重視せず、作品を、そういうものから独立した「テキスト」として解読するという批評の方法である。文学作品は、作家や時代から独立して、それだけで自立したもの、独立したものであるという考えである。この新批評の影響力は強く、現在においても、さまざまな文芸批評がこの新批評の考え方に拠って行われている。そして、野田宇太郎の「文学散歩」とは、この新批評の方法とは全く逆の方法なのである。作品を作者や時代背景と密接に関連付けて考えるという方法である。どちらが正しいという問題ではないが、野田宇太郎の文学散歩、あるいは文学研究の方法が、新批評の方法とは異なるものであるということは、確認しておく必要があると考える。この点については、文学散歩に関する考察のところで、改めて触れることにする。

さて、野田宇太郎が「文学散歩」を行うようになったきっかけは何であったのだろうか。それは、先の「序」にも少し触れられていたが、第二次世界大戦の空襲により、東京が大きな被害を受けたことに拠っている。

野田宇太郎は、「文学の環境探求の必要性」（『国文学 解釈と教材の研究』第11巻第12号 學燈社 1966年10月20日）において次のように記している。

わたくしが「新東京文学散歩」を書きはじめたのは、まだ東京中に焼け跡がのこり、過去の姿が無残に掻き消されたままの頃だった。これを世の移り変わりとして傍観していたら、文学的遺跡などは行方不明になることを思うとじっとしてもいられず、破れ靴の緒を締め直して歩きはじめた。当時進駐軍の占領下で、日本語さえもが危くなるような非常事態であったことも、それを書く動因であった。従って文学の環境探求などと言うような悠長なことではなく、もっと根本的な日本文化の擁護、敗戦の混乱による文化破壊の防御と反抗がその目的だったと言ってよい。

しかし、実際に一人の偉れた文学者の住んだ街や、その作品に描かれた場所を訪れてみると、それまでは全く予期しなかったほどの一種の感動がわたくしを捕らえはじめた。わたくしはその感動をできるだけ平静に、現実の記録として書きとめようと思った。そこには文学環境探求の必要性などという意識はなかったが、そこを訪れて文学者の生涯や作品成立の過程などを調べあわせてゆくうちに、自然にそれは文学環境の記録になった。

空襲により破壊された東京の文学的遺産を守り、記録し、それを後世に伝えねばという思いが、文学的遺跡を見て回らせ、そうしてゆくうちに、文学者ゆかりの地、作品の舞台の地が、さまざまな感動を野

田宇太郎に与え、その感動が、「文学散歩」というものに結晶していったのだという。

また、野田宇太郎の出身地である小郡市が出版した『小郡市史 第二巻 通史編』（小郡市史編集委員会 2003年6月）は、次のようなことを伝えている。1945年（昭和20）1月28日夜間の空襲により、森鷗外の旧宅「観潮楼」が焼失したが、それは、野田宇太郎に大きな衝撃を与えた。野田宇太郎は、その翌年、自らが創刊した「藝林間歩」の第二号（1946年5月）を「観潮楼」の記念号とし、その巻頭に、森鷗外の大理石の像のみが残る「観潮楼」の焼け跡の写真と、それについての野田宇太郎の解説と詩を掲載した。以下はその解説の一部である。

放課後帰途に就いた駒込中学の生徒をとらえて、あの像は誰かと問えども、一人も知らなかった。直ぐ前にある中学校にしてそれであった。道行く人がかえりみないのは当然である。それはそのまま現在の日本人の惨めさであった。このままに放置すれば一代の文豪鷗外の名前はおろか文学さへ消滅するのではあるまいか。いまこそ日本文化に対する我々の責任を果さねばならない秋である。

このようなことから、野田宇太郎は、この観潮楼の跡地に鷗外の記念館を建設しようと決意し、1962年（昭和37）の鷗外生誕100周年に、文京区立の鷗外記念本郷図書館が開館した。野田宇太郎は、敗戦という状況に立会い、自分の拠って立つ文化を、後世に引き渡すことを自分の使命と考え、その一つとして、鷗外の事績を伝えるため、その地に鷗外の記念館を建てようとしたのである。

野田宇太郎は、空襲により破壊された東京の文学的遺産を守るため、文学散歩という活動だけでなく、文学者の記念館も建設しようとした。野田宇太郎は、そのほかにも、藤村記念館（岐阜県中津川市馬籠）や明治村（愛知県犬山市内山）の建設にも深く関わっている。

そして、野田宇太郎のこのような活動を支えていたのは、木下杢太郎の言葉「古典とは背に廻った未来である」という言葉であったという。野田宇太郎は、木下杢太郎を尊敬しており、文学的遺産を後世に語り伝える「文学散歩」という活動や、森鷗外の文学を後世に引き継ぐべく鷗外の記念館を建設しようとする活動のもとには、木下杢太郎のこの考えが大きく働いていたのである。敗戦という状況下で、ややもすれば、戦前の文化というだけで、すべてが断ち切れ、省みられなくなる中で、その中から良いものを選定し、それを後世につないでゆこうとしたのである。

③野田宇太郎の『文学散歩』

野田宇太郎の最初の文学散歩の本である『新東京文学散歩』には、東京の区内を中心とした7つの文学散歩のコースが紹介されている。福岡県生まれの野田宇太郎が、東京の文学散歩から始めたのは、当時、東京に住んでいたからではあるが、先に挙げた『新東京文学散歩』の「序」にもあったように、日本近代の文学者の多くが、東京で創作活動を行っていたからである。『新東京文学散歩』の目次を挙げると以下のようなになる。

その一 上野・本郷・小石川・お茶ノ水

その二 日本橋・両国・浅草・深川・築地

その三 中洲・佃島・銀座・日比谷

その四 飯田町・牛込・雑司ヶ谷・早稲田・余丁町・大久保

その五 高輪・三田・麻布・麴町

その六 田端・根岸・龍泉寺・向島・亀戸

その七 武蔵野

追補記 谷中墓地 ケーベルの墓 二葉亭の旧居 与謝野寛・晶子の墓

それぞれのコースには、折込みの地図が付き、巻末には索引も付いている。

参考に、「その一」のみ、さらに細かな項目を挙げると次のようになる。かどで、「於母影」の町、露伴の「五重塔」、鈴木春信碑、観潮楼跡、「猫」を書いた家、「三四郎」の池、無縁坂、「湯島詣」、秋声遺宅、「スバル」の坂、一葉終焉の地、菊坂をすぎて。

森鷗外、夏目漱石をはじめ、幸田露伴、樋口一葉、泉鏡花、徳田秋声などが取り上げられ、明治文学の舞台となった文京区とその周辺を歩くというコースになっている。

当初、野田宇太郎は、版画家の織田一磨（1882-1956）と共に歩き、織田一磨は野田宇太郎の文章に合わせたスケッチをし、そのスケッチは、『新東京文学散歩』にも掲載された。織田一磨は、「パンの会」にも関わっており、明治大正の東京の歴史や地誌に詳しく、野田宇太郎の道案内役を果たしたという。その後、画家の木村荘八（1893-1958）が道連れとなり、挿絵を担当した。文学散歩は、その後、東京だけでなく、全国に広がってゆき、野田宇太郎は、ノートとその土地について最も詳しい地図を携え、日本各地を歩いていった。やがて、カメラを使うようになり、文学散歩の記録として写真を撮るようになる。「九州文学散歩」を西日本新聞に連載する際には、自分で撮った写真を掲載した。そして、「関西文学散歩」を大阪読売新聞に連載する際には、プロのカメラマンを伴い、その写真を使った。ただ、記録用に自分でも写真は撮り続け、現在、野田宇太郎文学資料館には、その際の写真のネガが相当数保管されている。このようにして、書き継がれた文学散歩は、文一総合出版から全24巻、別巻3巻にまとめられ、出版されたのである。

では、野田宇太郎の「文学散歩」という作品はどのようなものなのであろうか。それは、現在、われわれが思い浮かべる「文学散歩」とは、少々異なるものである。野田宇太郎の文学散歩は、一種の「紀行文学」であるというのが一番正確であるかもしれない。様ざまな場所を訪れ、文学者の居住したこと、作品の舞台となったことなどを、その土地の歴史を踏まえながら記すのだが、そこに、そのとき野田宇太郎が感じ、考えたこともしっかりと記してゆく。そこには、詩人として野田宇太郎が、生きつづけている感じを受ける。野田宇太郎の「文学散歩」は、単にその地域を文学の面から紹介したものではなく、それ自体が、一編の文学作品となっているのである。

野田宇太郎は、晩年、自分の「文学散歩」が誤解されていることを強く危惧し、1956年（昭和31）2月23日の産経時事新聞に、「文学散歩と案内 私の著作の誤解について」という記事を書いた。「題名だけならばまだよいとして文学散歩の模倣出版を拝見するとどれもこれもが一種の案内書にすぎないのを

見て私はあきれた。」「どこを捜しても一番大切な著者の眼が見当らない。つまり史眼がない。従って案内内ではあっても決してそれ自身文学書とはなっていない。』『新東京文学散歩』がベストセラーになった結果、安易に「文学散歩」という名称を冠した図書が多く出版され、そのことに対して抗議をしているのである。野田宇太郎の「文学散歩」は、文学作品を作者や歴史的、地理的背景からとらえようとするものであり、その土地の歴史地理を踏まえ、かつ、自分の考えも含めて書いてゆく「紀行文学」なのである。観光地の単なる案内書ではないのである。

以上が、野田宇太郎の文学散歩観であり、野田宇太郎の書いた「文学散歩」という作品の概要である。一般的に思われている「文学散歩」とは、少々異なるものではないだろうか。文学散歩というものを行う場合、また、文学散歩の意義や課題を考える場合、今一度、野田宇太郎に立ち返ることは大切なことであるように思える。

（3）他館の文学散歩

野田宇太郎が考えた文学散歩は、上記のようなものであったが、現在でも多くの文学散歩と題した本が出版され、また、多くの文学館が教育普及活動の中で文学散歩を行っている。「文学散歩」という言葉は、以前にも増して、盛んに使われているとあってよい。

現在、どのような文学散歩が開催されているのか。今回、この稿を書くにあたり、文学散歩を行っている東京都内の文学館にご協力を得て、その概要を調査させていただいたので、それらをここで紹介する。

①田端文士村記念館

- ・調査日：2010年10月14日（木）
- ・対応してくださった方：黒崎力弥（研究員）、長谷川恵理子（研究員）

田端文士村記念館は、田端にゆかりのある文士芸術家を紹介し、地域文化の振興を図るため、1993年（平成5）に開館した文学館で、北区文化振興財団が運営している。

田端は、もともと雑木林や田畑の広がる閑静な農村であったが、上野に1889年（明治22）、東京美術学校（現・東京藝術大学）が開校すると、次第に若い芸術家が住むようになった。1900年（明治33）に小杉放庵（洋画）が下宿し、1903年（明治36）に板谷波山（陶芸）が田端に窯を築くと、その縁もあって、吉田三郎（彫塑）、香取秀真（鍍金）、山本鼎（洋画）らが次々と田端に移って来、画家を中心に「ポップラ倶楽部」という社交の場もでき、<芸術家村>となっていった。つづいて、1914年（大正3）に芥川龍之介が、1916年（大正5）には室生犀星が転居して来、萩原朔太郎、菊池寛、堀辰雄、佐多稲子らも田端に集まった。こうして大正末から昭和にかけての田端は<文士村>の様相を呈するようになる。様々な芸術家の集まった田端を紹介するのが田端文士村記念館である。

田端文士村記念館では、資料の収集、保存、展示のほか、講演会や文士芸術家の居住地跡を散策する「田端ひととき散歩」を行っている。

この「田端ひととき散歩」という文学散歩は、田端文士村があったという地元の歴史や、文士や芸術

家の息吹を伝えると共に、作家の作品を読んでもらうことを目的にしている。この文学散歩は、1996年(平成8)から開始され、当初は内藤淳一郎館長が行っておられたが、現在は研究員が行っている。毎月第3土曜日が開催日で、7月、8月、1月、2月を休みにしており、年間8回の開催である。予約は不要で、無料であるが、参加者が多く見込まれる回は、事前申し込み制としている。13時から、初めの1時間はホールで事前の講義をし、そのあとの1時間を、実際に散歩しながら、文芸作家の住んでいた跡などを歩くというものである。定員は各回120名。講義と散歩を各1時間ずつにしたのは、当初、散歩だけであったが、屋外での長時間の説明は、高齢の参加者などには負担になるので、講義と散歩を分けたそうである。

2010年度の「田端ひととき散歩」の予定は下記のとおりである。

日時	タイトルおよび紹介する主な文芸作家
2010年 4月17日(土)	田端「画かき村」の時代 ～美術雑誌『方寸』の流れ～ 小杉放庵、山本鼎、森田恒友、倉田白羊、村山槐多
2010年 5月15日(土)	田端の工芸作家たち ～板谷波山の生涯を中心に～ 板谷波山、香取秀真、香取正彦、小川三知、内藤春治
2010年 6月19日(土)	芥川龍之介と田端 ～華麗なる交友～ (要申し込み) 香取秀真、下島勲、鹿島龍蔵、小穴隆一、瀧井孝作
2010年 9月18日(土)	田端に暮らした歌人と童話作家 ～歌の調べに寄せて～ 土屋文明、太田水穂、四賀光子、野口雨情、サトウハチロー
2010年 10月16日(土)	昭和大衆小説の大家と田端 ～若き才能の集いと研鑽～ 村上元三、川口松太郎、岩田専太郎、石井鶴三、直木三十五
2010年 11月20日(土)	室生犀星の生涯 ～田端から馬込へ～ (要申し込み) 室生犀星が愛した田端、馬込、二大文士村を巡る
2010年 12月18日(土)	子規墓所に通じる道 ～正岡子規ゆかりの人々と田端～ (要申し込み) 正岡子規、香取秀真、土屋文明、鹿兒島寿蔵、ぬやまひろし
2011年 3月19日(土)	『青鞥』から離れた平塚らいてう ～新しき女性を囲んだ田端文芸作家～ 平塚らいてう、野上弥生子、佐多稲子、芥川龍之介、室生犀星

田端のあたりは、狭い道が入り組み、また、土地の高低差もあり、地形の変化が豊かで、そのような場所を歩いて散策するのは、極めて興味深いものである。しかし、現在、区画整理が田端文士村の地域内で行われ、かつての道や町並みを歩くことが不可能になってきた場所も出てきているそうである。また、北区以外にも出かけ、大田区の馬込文士村の文学散歩も行っている。

さらに、印刷物として、田端文士村の「散策マップ」や「田端文士村芸術家しおり」も作成している。来館者に配布するもので、田端文士村の地図と、居住していた芸術家、文学者についての説明が載っている。「田端ひととき散歩」に参加できない人も、その地図によって、田端文士村の文学散歩ができるようになってきている。ただ、田端文士村の地域内での区画整理などのため、その地図が現状と異なるようになってしまい、その地図は、田端文士村の記録という新たな価値も持ち始めたそうである。

②世田谷文学館

・調査日：2010年11月11日（木）

・対応して下さった方：瀬川ゆき（学芸課長）

世田谷文学館は、ジャンルの枠にとらわれない文学館、幅広い層に親しまれる文学館、生き生きと活動する文学館を目指し、1995年（平成7）4月に開館した文学館で、財団法人せたがや文化財団によって運営されている。世田谷区は、明治時代以降、鉄道網が発達し、それに伴い住宅地も増え、敗戦後は多くの大学ができ、学園都市としても発展してきた。そのような世田谷区には、多くの文学者も住むようになり、文学作品の舞台にもなった。このような文化的に豊かな環境を活かして、世田谷文学館は、世田谷に関する文学関係資料の収集、管理、公開事業を行っている。また、東京都の市区町村立の文学館では、最初の近代総合文学館でもある。

世田谷文学館では、教育普及活動も活発に展開しており、文学散歩もその一つである。現在、学芸員が行っている文学散歩は、一年に一回行われており、文学散歩と「文学散歩マップ」作りがセットになったものである。

一般的に言って、文学散歩は、参加者が極めて限られ、多くの方に参加してもらうことが難しい事業である。そこで、世田谷文学館では、文学散歩のコースと短い解説を、イラスト入りの一枚の文学散歩マップに印刷し、それを、文学散歩が終了しても配布し、文学散歩に参加できない人々にも文学散歩を楽しんでもらうよう工夫している。その文学散歩マップには、それまで館が蓄積してきた調査研究の成果を反映することができるし、常設展示室内に置けば、解説シートにもなる。また、複数名で一緒に歩く文学散歩という形態を好まない人には、それを持って一人で歩いてもらうこともできるわけである。

世田谷文学館の文学散歩では、参加者20名と、その回にとりあげた場所を歩くのであるが、その土地の文学的な説明は学芸員が行い、そのほかにも、実際にその土地を知っている方や、ゆかりの文学者と交友のあった方などからもお話を聞くという工夫をしている。文学の話と、それにまつわるその土地の歴史や文学者の生活などの話をうまくからめて文学散歩を構成し、町の魅力を多方面から味わうことができるのである。

このように、文学散歩と文学散歩マップ作成をセットにした文学散歩は、2007年度から始まった。9月から11月にかけて行われる、世田谷区と財団法人せたがや文化財団が主催の「世田谷芸術百華」という、区内各地で開催される多彩なアートイベントの一環としての事業である。

最初の年の2007年度は、「J・J気分で経堂散歩」という文学散歩で、エッセイスト、評論家の植草甚一（1908-1979）にゆかりのある経堂界隈を歩くというものであった。この文学散歩は、世田谷文学館での企画展「植草甚一 マイ・フェイヴァリット・シングズ」と関連させたものでもあった。1960年代から70年代にかけて若者文化のシンボリック的存在であった植草甚一は、1950年から亡くなるまで世田谷区（北沢、赤堤、経堂）に居住していた。文学散歩というと、若い世代の人々はなかなか参加しない傾向があるが、この文学散歩は、その若い世代をターゲットにしたものでもあった。2008年度は、「世田谷線の小さな旅」という路面電車の世田谷線を使っの文学散歩。初めに、三軒茶屋にあるキャロットタワー内で事前の講義をし、それから、貸し切りの世田谷線に乗り、車内で沿線案内を聞く。そして、世

田谷八幡宮と豪徳寺を見学、豪徳寺ではその土地の本屋さんに話をしてもらおうというものである。2009年度は、「シモキタザワ 猫町散歩」という下北沢界隈の文学散歩。萩原朔太郎の短編小説「猫町」は、萩原朔太郎が住んでいた世田谷区の代田近辺からインスピレーションを受けたもので、その「猫町」をタイトルに付けたものである。森鷗外の娘で、エッセイストの森茉莉行きつけだった喫茶店「邪宗門」(世田谷区代田)にも行く。2010年度は、「成城ものがたり」という成城学園界隈の文学散歩。民俗学者の柳田国男の蔵書を引き継いだ成城大学民俗学研究所や、猪俣庭園を回り、そして、成城学園前の風月堂で、そこのご主人から話を聞いた。

世田谷区の面積は広く、各地域の性質も異なることから、いくつかの地域に分け、それぞれの地域ごとに文学散歩を行い、その地域の魅力を再発見してもらおうというものである。

このほかにも、企画展によっては、その企画展にあわせての文学散歩を行ったり、友の会の方々が、自主的に文学散歩をしたりしている。

課題としては、文学散歩の参加者の世代が、高くなっていることで、若い世代に参加してもらおうような企画が必要であると痛感されている。若い世代は、比較的、一人か少人数で、自由に歩きたいと思う気持ちがあり、集団で行動する文学散歩には、あまり魅かれられないのかもしれない。文学散歩とセットにして作成される文学散歩マップは、したがってそのような人々にとっては、極めて有効性が高いものであろう。また、実際の文学散歩の際は、住宅地を歩くことになり、近隣の方にご迷惑をかける可能性があり、また、プライバシーの問題にも関わりかねないこともあり、十分留意する必要があるということである。文学散歩マップもその点には配慮して作成している。

③町田市民文学館ことばらんど

・調査日：2010年11月11日(木)

・対応してくださった方：山端穂(学芸員)、神林由貴子(学芸員)

町田市民文学館ことばらんどは、1997年(平成9)、遠藤周作(1923-1996)の遺族から、蔵書遺品の寄贈があったことをきっかけとしてつくられた文学館である。2006年(平成18)に開館し、町田市が直接運営をしている。

町田市は、1960年代後半から1970年代前半の高度経済成長期に、農村から大都市近郊のベッドタウンへと変貌し、その過程で全国各地の人々が町田市に移り住んだが、その中には文学者も多くいた。また、北村透谷(1868-1894)、八木重吉(1898-1927)、白洲正子(1910-1998)、野田宇太郎(1909-1984)などにゆかりの地もあり、町田市は文学の市とすることができる。このような環境のもと、町田市民文学館ことばらんどは、町田市ゆかりの作家に関連する資料の収集、管理、展示などの公開、また、教育普及事業を展開している。特徴的なのは、資料の一般公開を積極的に行っていることで、町田市立図書館の利用カードを使えば、館所蔵の図書資料の一部を借りることができるようになっている。これは、町田市民文学館ことばらんどが、市立図書館の分館という位置づけであるために可能となっているサービスである。また、文学館が、市民の出会いや交流の拠点となるようにと、2007年(平成19)から「市民研究員制度」という制度を設け、市民の文学活動を支援していることである。町田市民が、学芸員や専門

家の協力を得ながら町田の文学を研究する制度である。

町田市民文学館ことばらんの文学散歩は、大きく二種類に分けられる。一つは、市民研究員が行っているもの、もう一つは学芸員が行っているものである。

市民研究員が行っている文学散歩は、1年あるいは2年かけて、町田市内の特定の地域の文学散歩マップを作成することから始まる。市民研究員と学芸員が、定期的に研究会を開き、その地域に関連する文学者などを勉強し、また、実際に現場を調査しながら、A3判一枚の文学散歩マップを作成するのである。表は、文学散歩の地図、裏は、その地域に関する文学者などの説明が記されている。2008年（平成20）3月31日には「鶴川篇」、2008年（平成20）12月31日には「町田駅・本町田篇」、2009年（平成21）1月31日には「相原・小山田篇」が作成された。そして、それらの3つの文学散歩をまとめる形で、2009年2月1日（日）～4月12日（日）、展覧会「町田市民文学館研究員発表展まちだ文学さんぽ」が開催され、開催期間中に市民研究員の方々による4つの文学散歩（①町田駅周辺、②相原駅周辺、③鶴川駅周辺、④本町田周辺）が行われた。また、展示解説やギャラリートークも市民研究員によって行われた。

市民研究員には、60歳代から70歳代の方が多く、レベルも様ざまのようであるが、1年から2年の自主的な学習を経て、町田市ゆかりの文学者について勉強し、また、文学散歩マップを完成させることで学習の達成感を感じているという。

もう一つの、学芸員による文学散歩は、企画展に関連させての文学散歩である。2010年1月31日（日）から3月28日（日）まで開催された「ことばの森の住人たち 町田ゆかりの文学者展」では、「文学散歩 野田宇太郎の「文学散歩」を歩く」という文学散歩が2回（①東京文学散歩～日比谷・銀座界隈を歩く、②湘南相模野文学散歩～透谷ゆかりの小田原を訪ねる）開催された。既に述べた野田宇太郎は、1973年（昭和48）から10年間町田市に住んでいて、町田ゆかりの文学者ということになり、その野田宇太郎の『文学散歩』に書かれた場所を実際に歩くというユニークな文学散歩である。野田宇太郎自身の文章や、文学者の作品をテキストにしなが、野田宇太郎の文学散歩を再経験するものである。学芸員による文学散歩は、町田の文学者に関わる場合であれば、町田市の外にも出て行き、広い立場から町田の文学者を考えることができる文学散歩となっている。

（4）文学散歩についての考察

当館の漱石文学散歩、野田宇太郎の文学散歩観、そして、他館の文学散歩の状況を紹介した。それらをもとに、文学散歩について、改めて考えたことを以下にまとめてみる。

これまでも述べてきたが、文学散歩には、大きく二つの種類があると考えられる。一つは、作品の舞台となった場所を歩く場合、もう一つは、作家ゆかりの場所（生まれた場所、住んだ場所、旅行した場所、亡くなった場所など）を歩く場合である。むろん、実際の文学散歩では、双方のものが混在する場合もあるが、便宜的に二つに分けることができる。

作品の舞台を歩く文学散歩を行えるのは、文学作品の中に、実際に存在する地名が出ている場合で、その場所を実際に歩いて、小説の世界を疑似体験し、また、舞台となった場所を学ぶことで、作品をより深く鑑賞しようとするものである。むろん、このような文学散歩は、作品の中に現実の具体的な地名

が出てくる作品に限られることになる。

一方、作者ゆかりの場所を歩く文学散歩では、あらゆる作家についての文学散歩が可能となる。作家が、住んだり、旅をしたりした場所に実際に行ってみて、その土地を実感する。それは、作家ゆかりの土地の気候風土や歴史を学ぶことで、作家の人生や作品の生まれた背景をより深く理解しようとするものである。

このように、文学散歩を二つに分け、以下、それぞれについて考えたことを記してみる。

①作品の舞台となった場所を歩く文学散歩

当館の行った漱石文学散歩は、作品の舞台となった場所を、実際に歩いてみるという文学散歩である。作品中に実際の地名が出てきており、また、当時の様子がかかなり忠実に書かれていることから可能になった文学散歩であることは、すでに説明した。

このような文学散歩では、作品の舞台となった場所に行き、小説の世界を疑似体験し、また、その場所の気候風土や歴史などの特徴を学ぶことによって、その作品をより深く理解し、鑑賞することを目的とする。この場合、その作品が書かれた当時の様子と、現在の様子があまり変わっていなければ、より一層、その目的は達せられることになる。例えば、『三四郎』の場合であるが、三四郎とヒロインの美禰子が出会う、いわゆる三四郎池は、書かれた当時と現在はあまり変わっておらず、実際に行ってみることで小説の世界をより具体的に把握できる。また、『それから』では、ヒロインの三千代が、愛する代助の家を幾度も訪れるが、坂を下りまた坂を登って行くその行程の大変さは、実際にそこを歩いてみて初めて分かるものである。『門』の場合では、舞台となったと想定される崖が現在も残っており、その崖の上と下の家の対比は、実際に見てみると改めて分かるものである。『こころ』では、「先生」の親友で自殺してしまったKの墓が、雑司ヶ谷霊園にあるという想定であるが、実際の雑司ヶ谷霊園の静かな雰囲気は、「先生」の苦しみに思いをはせさせる。このように、現在でも、作品に描かれた場所の様子が残っている場合は、作品鑑賞の幅を広げさせてくれる。

しかし、文学作品が、言語によって成立している芸術であることを考えると、文学散歩という行為、実際に作品の舞台となった場所を歩くという行為に意味があるか、という疑問もわいてくる。つまり、文学作品は、もともと言語のみによって成立している芸術であり、読者は、言語表現の巧みさ、美しさを鑑賞するものであるから、たとえ作品の舞台となった現実の場所を知らなくとも、作家の文章によって様ざまにその場所を想像し、楽しむことができる。言語芸術である文学作品を理解、鑑賞するために、実際に舞台となった所を知っている必要も、そこに行く必要もないのである。もし、その場所に行かなければ十分に理解し、鑑賞できない作品があるとするならば、それは、その文学作品が不十分であり、優れた作品ではないことを示すことになる。言語での説明が不十分であり、現実で補わなくてはならないからである。また、作者にとっては、巧みな文章によって場所を記述し、たとえ現実の場所がモデルになっていたとしても、その場所とは一旦離れて、言語のみによってその場所を改めて作り上げてゆくのの仕事であり、言語によって、いかにその場所のイメージを豊かに作り上げてゆくかが腕の見せ所なのである。

むろん、新聞小説の場合は、読者もよく知っている、具体的な場所や時代背景を舞台とするわけであるが、とって作者は、その分、場所や時代背景の記述を省略してよいわけではない。言語による芸術である限り、場所の記述は、その作品の内部で必要十分に行う必要があり、文学作品として、現実から独立した場の雰囲気を作り出すのが、文学者の仕事なのである。また、新聞小説の読者は、自分の知っている場所が出てくれば、それだけ理解や鑑賞が助けられはするが、最終的に作品を読む楽しみは、文章を読む楽しみであり、その場所を知らなければ知らないで、想像によってその場所を描きだし、その場所に行って実際の様子を確認する必要は全くないのである。

このように考えれば、文学散歩を行って、作品の舞台になった場所に行くということは、文学鑑賞にとって、一体、どのような事を行っているのか、どのような意味があるのか、疑問に思えてくるのである。

今回行なった漱石文学散歩でも、『三四郎』の場合、三四郎池を実際に見て、文章で読んで想像していたものとは異なり、幻滅したという参加者もいた。また、『彼岸過迄』や『行人』の文学散歩では、実際に舞台となった場所を歩いてみて、その地域の特徴は現在にもしっかり引き継がれていたが、書かれた当時の様子は、現在では残っておらず、作品の中の具体的な世界を直接的にイメージすることは容易ではなかった。

さらに、文学作品においては、人間の感情や思想が、まず第一のテーマであるが、文学散歩では、その背景となった場所や時代背景を主に扱うことになり、主人公の感情や思想などを見過ぎがちとなる。

このように考えてみると、作品の舞台となった場所を歩くという文学散歩の価値が極めて少ないように思えてくる。

では、文学散歩とは、そもそも文学という言語による芸術にそぐわないものなのだろうか。文学散歩とは、文学作品の理解や鑑賞にとってどのような意味があるのだろうか。

今、この問いに十分に答えることはできないが、仮に、次のように考えることができるのではないだろうか。文学作品とは、確かに基本的なところでは、言語によってのみ成立し、実際の場所や時代からは独立した世界を作っている言語美の世界である。これは、先にあげた「新批評」が指摘し、改めて明らかにされた文学作品の本質であり、このことに誤りはない。

しかし、だからといって、その舞台となった場所に行くことを妨げる必要は必ずしもないだろう。文学作品が、現実に存在した場所を舞台としている場合、その作品が書かれた現実の地域や時代という面から、その作品を読み解いてゆくことは、決して誤りとはいえない。

作品の舞台となった場所を実際に歩くことで、その場所の特徴を言葉だけでなく、五感で実感することもできるし、またその場所の気候風土や歴史を学ぶことで、登場人物の社会的立場や性格なども、よりよく理解することもできる。たとえば、『それから』では、病気がちの平岡三千代が、自分の家のある伝通院のそばから、神楽坂の代助の家まで何度も往復するのであるが、散歩では、その上り下りの激しい坂を実際に歩き、美千代が代助を恋う、その強い気持ちを改めて実感することできた。また、漱石の作品の登場人物の居住する場所は、それぞれの社会的立場や性格を典型的に表している場所が選ばれており、その場所のその時代の特徴を学べば、より深く登場人物を理解することもできる。『それから』

の主人公の代助は、大学を出ても職につかず、裕福な親に面倒を見てもらいながら、神楽坂を少し外れた藁店わらだなという所に下女を伴って住んでいる。実際の神楽坂は、当時、商店が多く立ち並ぶ繁華街であったが、藁店は、少し奥まった場所で、一人で住むには格好の場所であったろうと思われる。また、代助の実家は、青山に設定されているが、青山は高級住宅街であり、実家の裕福さが示されている。さらに、代助の親友であった平岡とその妻三千代が住むのは、小石川の伝通院の近くであるが、当時のそのあたりは、安価な新興住宅が立ち並ぶ地域で、平岡の経済状態の苦しさ、さらに、平岡というかつての親友が、次第に疲弊していつていることを示している。このようなそれぞれの場所の性質は、作品中には詳細には書かれておらず、実際のそれぞれの場所について学べば、その場所の性質が分かり、登場人物の姿が、より一層はっきりとしてくるのである。

このように、漱石文学散歩では、実際のその場所の地理的特徴や歴史とからめながら、作品を読み、また、実際にその場所を歩くことで、作品中の言語からだけではわからないような解釈や鑑賞を試みることができたのである。

また、漱石文学散歩では、東京という都市を考えることにもなった。都市のそれぞれの場所は、それぞれの性質を持ち、また、有機的に関係し合っており、そのような都市を舞台として、人間の劇が展開していることが分かったのである。

さらに、漱石文学散歩の場合では、さほどでもないが、気候が、極端に暑いとか寒いとかする地域を舞台とした作品では、そのような時期にその場所に行き、その気候を体感することで、その作品を身近に感じることができるようになるかもしれない。また、外国の作品の舞台を歩くという文学散歩も考えられるが、その場合は、気候風土のみならず、社会文化も大きく異なるわけで、実際にその作品の舞台となった場所に行くことは、その作品の前提条件を確認することになり、作品を理解、鑑賞するためには、大いに役立つことになるであろう。

以上のように、文学散歩によって、その作品の舞台となった場所を歩くことは、文学作品が、言語によって成立している芸術作品であることを認めつつ、さらに、その言語の外に出て、その作品に直接書かれていない事柄からも文学作品へ接近しようとすることである。それは、決して、文学作品の理解や鑑賞にとって邪道ではなく、そこから、さらに新たな作品の読解が生まれ、作者の感情や思想にも踏み込んでゆく可能性があるであろう。文学散歩は、文学作品を様ざまに理解し鑑賞する一つの有効な手段となりえるのではないだろうか。

②作者ゆかりの場所を歩く文学散歩

二つ目の文学散歩は、作者ゆかりの地を歩くという文学散歩である。生まれた場所、居住した場所、旅行した場所など、作家の実人生で関わりのあった場所すべてが散歩地となりうる。それらの場所を歩くことによって、その土地の気候風土や歴史の特徴を知り、その文学者の一生や作品の生まれた背景をより具体的に学ぶというものである。

今回、調査を行った東京都内の3館は、いずれもこのタイプの文学散歩を中心に行っていると言ってよいだろう。各館では、区や市に居住したり、関わったりした文学者たちに関わる場所の地図を作り、

それらの場所を実際に歩くというものであった。

そもそも、文学の楽しみには、作品を読む楽しみのほかにも、作家の生活や人生を知り、その思想を探るといふ楽しさもある。その作家がどのような生活をし、どのような人と交流し、どのような考えを持っていたか、生まれてから死ぬまで、どのような人生を過ごしたかを知ることは、文学の楽しみの一つであると言っていい。また、作家の実人生を探ることは、その作品の特徴や意味を読み解いてゆくことにもつながり、すでに確立された文学研究の一つの方法でさえある。そして、作家ゆかりの地を歩くという文学散歩は、そのような作家の人生を探る有効な手段の一つにもなろう。実際にその作家ゆかりの地を歩き、その気候風土や歴史を調べ、その場所での作家の事績を学ぶことは、作者をより具体的に知り、作品理解のきっかけも得ることができる。

また、今回調査をさせていただいた文学館の文学散歩で共通するのは、各館が、文学者ゆかりの地を歩くことによって、各地域を見直したり、再発見したりしながら、その地域に親しんでもらっているということである。各館は、おのおのの地域で文学散歩をすることにより、その土地の歴史を文学の面から確認し、それを後世に伝えてゆく。それは、それぞれの館の使命が、各地域の文化の振興であることから、必然的に起こってくることであろう。それは、地域の文学館ならではの価値ある活動である。作家ゆかりの地を歩く文学散歩は、その地域の文学館の使命を遂行するための重要な手段にもなっているのである。これは、文学だけの問題ではなく、広くその地域の歴史も含んだ、地域文化の問題と言ってもいいかもしれない。

ここで、改めて思われるのは、野田宇太郎の文学散歩観である。野田宇太郎は、文学作品を理解するのに、作家の実人生や、その作家のゆかりの場所の理解が必要であると説いた。そこから文学散歩という方法が生まれてきたのであるが、文学館の活動を見ると、文学散歩のみならず、文学館そのものが、野田宇太郎の文学散歩観に拠って存在していると考えられないだろうか。つまり、各地の文学館は、各地ゆかりの文学者をとりあげ、その文学者のその地での事績を紹介し、その地域の特徴も紹介している。それはそのまま、作家の実人生や、ゆかりの土地を理解することが、文学作品を理解するのに必要な事であると言った野田宇太郎の文学散歩観と重なり、現在の文学館の活動は、野田宇太郎の文学散歩観の上に展開していると言える。野田宇太郎が文学館に果たした役割は、意外に根本的な部分に及んでいるのではなかろうか。

さて、以上のように、文学散歩を二つに分けて考えてみたが、作者ゆかりの場所を歩くだけでなく、作品の舞台となった場所を歩く場合もそうであるが、文学散歩とは、文学者や文学作品の面から、その土地が積み重ねてきた歴史を改めて確認し、評価することになる。これは、文学だけの問題というより、地理や歴史の問題でもある。文学散歩をするということは、文学のみでなく、地理や歴史も総合的に学ぶことになり、そこに文学散歩の特徴と魅力があるのではないだろうか。

2. 漱石文学散歩の記録

(1) 漱石文学散歩の実施

漱石文学散歩は、夏目漱石の前期三部作（『三四郎』、『それから』、『門』）および後期三部作（『彼岸過迄』、『行人』、『こころ』）の舞台となった東京都内を歩くというもので、2001年（平成13）から2009年（平成21）まで、一年に一作ずつ行ってきた。（ただし、2004年（平成16）から2006年（平成18）までの3年間は中断した。）それぞれ2日間で1作品を扱い、1日目は講義形式で、1時間半、作品の概要や舞台となった土地の地理や歴史を説明し、2日目に作品の舞台となった場所を2時間、実際に歩くというものである。

当館が行った漱石文学散歩の特徴として、次のようなことが挙げられる。まず、当館は文学館ではなく歴史系博物館であるという性格を踏まえ、文学面だけでなく、歴史面についても配慮をしたということである。講座においては、舞台となった場所の歴史的地理的説明を行い、作品を歴史や地理の面からも理解し、鑑賞するようにした。これは、文学散歩に関する考察の部分でも述べたが、文学作品という言葉の世界を出て、その土地の地理や歴史の面からも作品に接することにより、作品のより広い理解と鑑賞を試みたわけである。また、東京という大都市の特徴、つまり、特徴ある様ざまな地域が有機的に関連して成立しているということも、そこから浮かび上がり、東京という都市の特徴についても、漱石文学散歩を通じて学ぶことができた。

また、実際に散歩をするに際しては、作品に直接関係のない史跡なども、重要なものに関しては説明を行い、散歩自体を楽しむようにしたことも、この文学散歩の特徴の一つではなからうか。

さらに、一般的に文学散歩においては作品の背景となった地理や歴史に焦点が当てられ、作品のテーマである登場人物の思想や感情などの面については、あまり扱われないという傾向があるので、1日目の講義のときには、文学散歩とは直接関係なくても、作品のテーマについてもいくつかのポイントを紹介するようにした。

講義、散歩双方において、文学の面では行吉正一が担当し、歴史地理の面では田中実穂が担当した。

漱石文学散歩の実施に際し、参考とした主な文献は、最後に掲げるが、特に、漱石の作品の舞台となった場所を実証的に検証している武田勝彦氏の『漱石の東京』（早稲田大学出版文学館 1997年）および『漱石の東京2』（早稲田大学出版文学館 2000年）を参考にさせていただいた。

実際の文学散歩を行うに際しては、次のような点を考慮した。

まず、受講にあたり、参加者は、とりあげる作品をあらかじめ読んでくることを前提とした。講義でも作品の概要は説明したが、この文学散歩は、参加者の自主的な学習を補助することを目的としたものであり、作品は事前に各自読むという、参加者の積極的な学習を前提とした。

漱石文学散歩開催の時期は、気候がよく歩きやすい10月から11月を選んだ。散歩の時間は、あまり長くなると受講者が疲れるので2時間とした。定員は、当初20名であったが、参加希望者が多く、途中から36名まで増やした。ただ、実際に町中を歩くことを考慮すると36名が上限であるように感じている。散歩の実施には、担当学芸員の行吉正一、田中実穂に加え、事務局の2名が付き添った。散歩の際の具

体的な留意点としては、なるべくゆっくり歩き、散歩自体を楽しむようにしたこと、途中、トイレのある場所で休憩を入れたことなどである。また、町中での説明は、声が受講者にとどかず、聞きづらくなることもあり、大きくゆっくり話すよう留意した。『行人』と『ころ』の文学散歩では、無線のイヤホンレシーバーを使用した。（受講者はイヤホンレシーバーを耳に装着し、学芸員が小型マイクで話すと、受講者に聞こえるというもの。）なお、参加者には保険に入ってもらったが、加入手続きなどは事務局で行った。

以下、漱石文学散歩全6回の概要を記す。

（2）漱石文学散歩 第1回 『三四郎』

①実施概要

- ・講 義 2001年10月24日（水）午後2時30分から4時まで
東京都江戸東京博物館 1階学習室2
- ・散 歩 2001年10月31日（水）午後1時30分から3時30分まで
- ・募集方法 往復はがきによる募集
- ・定 員 20名
- ・受 講 料 1,000円

②講義の内容

（ア）夏目漱石と新聞小説（行吉正一）

- ・新聞小説の技法

『三四郎』の初出が「朝日新聞」であることについて、新聞掲載時に描かれた挿絵の作者、名取春仙（1886-1960）について、および新聞小説の特徴と漱石が朝日新聞社に入社する際の交渉について説明した。

- ・『三四郎』のモデル

『三四郎』の登場人物に実在人物のモデルがいたことを説明した。

（イ）本郷の地理（田中実穂）

主人公の三四郎が学ぶ東京帝国大学のある本郷は、土地の起伏に富んでおり、作中でも「岡」「崖」「谷」と表現されている。本郷区（現・文京区）は武蔵野台地と下町低地の境に位置することから、台地と低地を結ぶ道はおのずと坂道となる。また、三四郎と美禰子が初めて出会う大学構内の池（現・三四郎池）は小高い崖に囲まれており、水面との標高差は約10mにもなることから、池の低い陰にしゃがんでいる三四郎と、夕日に向けて丘の上に立つ女（美禰子）との対比が印象深い場面となっている。

（ウ）本郷の歴史（田中実穂）

1657年（明暦3）に発生した明暦の大火後、加賀藩前田家は本郷に約2万坪の上屋敷地を拝領した。屋敷内では庭園の造成が進められ、前述の池も心字池として整備された。1827年（文政

10) には、11代将軍徳川家斉の息女・溶姫やすひめが前田家13代藩主齊泰やすなりに嫁ぐのに際して、朱塗りの御守殿門（現・東京大学赤門）が建造される。御守殿門は一度焼失などした場合、再建が許可されていないことから、延焼を防ぐために、屋敷に隣接していた本郷五丁目・六丁目の町家の一部を、筋違御門外、浅草御門外および桜田方面へ移転させた。その様子は「御守殿ができて町屋はかたはずし（片外し）」という川柳に詠まれている。

本郷の町は中山道に沿って展開し、特に本郷三丁目では乳香散という歯磨粉を扱う「かねやす」という小間物屋が繁盛した。また、1730年（享保15）には池之端七軒町から出火した火事が湯島・本郷・小石川に拡大したことにより、日本橋から加賀藩前田家上屋敷の手前の本郷三丁目付近までの建物は、防火のため土蔵造りに改め、屋根を瓦葺きにすることを命じられた。「本郷も かねやすまでは江戸の内」という川柳は、かねやすの辺りを境に町の景観が変わることを表している。

明治時代になり、加賀藩前田家上屋敷地は文部省の用地を経て東京大学（後に帝国大学、東京帝国大学）となる。そして路面電車が開通し、本郷三丁目は「電車の通街となりて、おもかげを一変せり。本郷電車の通街にして、区内第一の繁華の地なり。」（『新撰東京名所図会 本郷区之部』）となり、九州から上京した三四郎をして「第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それからそのちんちん鳴るあいだに、非常に多くの人間が乗ったり降りたりするので驚いた。」（2章）と不安にさせているほどである。

（エ）鉄道 東京の外と内（田中実穂）

物語は、上京する三四郎が乗る汽車内の様子から始まる。三四郎は福岡県京都郡みやこの出身であり、上京するには、1895年（明治28）に開業した行橋駅（現・福岡県行橋市）から九州鉄道に乗り、下関－神戸間は山陽線、神戸から先は東海道線を利用する。東海道線は、名古屋止まりの汽車のため当地で一泊、豊橋、浜松を経て新橋に到着する。三四郎を乗せて、九州から東京を目指す汽車の内と外の描写から、物語が執筆された1908年（明治41）における国内の鉄道網のあらましについて説明した。

東京に到着した三四郎を驚かせた路面電車は、1906年（明治39）に設立された東京鉄道株式会社が運営していた。市内における交通機関は、個人単位の輸送から、車輛による集団輸送へと発展していく。発展の過程における、乗合馬車や馬車鉄道から電気鉄道への変遷と、三四郎が利用した当時の鉄道の路線について説明した。

（オ）東京大学（行吉正一）

『三四郎』は、東京帝国大学で学ぶため地方から上京した小川三四郎が、新しい文明や様々な人物と出会う青春物語である。まず、主人公が学ぶ東京帝国大学の歴史について、当時の写真なども紹介しながら説明した。また、『三四郎』が発表された1908年（明治41）当時の若者文化についても説明した。日露戦争後、国家の目的が一応達成され、青年たちの関心は国家から個人の生き方へと向かう。そこから、特に青年たちの間には、個人主義の風潮が起き、『三四郎』の若者たち、小川三四郎、佐々木与次郎、里見美禰子ストレイ・シーブのような、個人主義を模索する「迷羊」たち

が登場する。東京帝国大学は、その典型的な舞台でもあった。

(カ) 学生の生活（田中実穂）

三四郎の下宿がある本郷追分は第一高等学校（現・東京大学農学部的位置）に近く、下宿業者が多かった。三四郎は、国元から毎月送られる20円により下宿代を支払い、賄い付きではあるがたまにライスカレーや蕎麦を食べ、葡萄酒を飲んだりする。東京で学生生活を送る三四郎の姿を通して、当時の学生を取り巻く生活環境について説明した。

(キ) 団子坂の菊人形（行吉正一）

文京区千駄木の団子坂は、明治時代、菊人形の見世物で賑わった。三四郎たちは、秋のある日、菊人形見物にでかけ、三四郎と美禰子は坂を下りて少し行った所を流れる藍染川で語り合う。ここで、三四郎は、「^{ストレイ・シープ}迷羊」という謎の言葉を美禰子から投げかけられる。明治時代の、細くて急勾配であった団子坂の様子や、現在は暗渠になっている藍染川について説明した。

(ク) 登場人物の住宅（行吉正一）

『三四郎』に描かれた登場人物たちの住宅について説明した。美禰子との仲が取り沙汰されていた、若い研究者野々村宗八の大久保の家では、近くで轢死（鉄道自殺）がある。『三四郎』が書かれた当時は、鉄道の発達により、実際に轢死による自殺が流行り始めていた。また、三四郎が尊敬する広田先生の家の間取りや、美禰子の家の間取りなども説明する。

(ケ) 文化施設（本郷座・本郷中央教会）（行吉正一）

『三四郎』には、東京の最先端の文化施設が数多く描かれているが、第12章に登場する「演芸会」は、本郷座での舞台がモデルと考えられる。本郷座は本郷にあった劇場で、新派の劇場として活気を呈した。本郷にあることから学生が集まり、また、路面電車も通じたことから、多くの人々が新派の演劇を見るために集まった。また、美禰子が通っていた教会は、本郷中央教会とも考えられるが、この教会はメソジスト教会で、1890年（明治23）、学者や学生の間に布教するため本郷に建てられ、教会事業のみならず、社会文化活動も行っていた。美禰子は、ここで「われは我が咎を知る。我が罪は我が前にあり。」とつぶやく。三四郎と美禰子は、最後にこの教会で別れることになる。

③散歩の行程（別添地図参照）

『三四郎』の舞台は、東京帝国大学近辺であることから、文学散歩には、東京大学を中心とした地域を選んだ。美禰子の通っていたと考えられる本郷中央教会、三四郎池や運動場が残っている東京大学構内、三四郎の下宿が設定された本郷追分、三四郎たちが菊人形を見た団子坂、三四郎と美禰子が語り合った藍染川（現・台東区谷中3丁目の夜店通り）という行程を歩いた。

明治時代の東京帝国大学の校舎は関東大震災で崩壊し、新しい校舎になっているが、『三四郎』に出てくる三四郎池や運動場などは残っており、かつての様子をしのぶことができた。東京大学界限には、文京の地の性格が今も引き継がれており、三四郎たちの青春の面影を、今でも感じることができる。団子坂はかつてのように狭く急峻ではなくなっており、また、藍染川も暗渠になり、その周囲に

は商店が立ち並び、かつての面影はなくなっていた。『三四郎』に記されたかつての団子坂、藍染川は、文学作品としてのみでなく、土地の歴史の記録としても価値を持つと思われた。

文学散歩の具体的な行程は以下の通りである。

(ア) 営団地下鉄丸ノ内線 本郷三丁目駅改札口 (集合場所)

(イ) 本郷中央教会 (文京区本郷3-37-9)

・1890年(明治23)日本メソジスト教会「中央会堂」として創立された教会であることを説明。

(ウ) 東京大学本郷キャンパス 赤門 (文京区本郷7-3)

・赤門(御守殿門)建造の由来を中心に、江戸時代における加賀藩前田家上屋敷について説明。

(エ) 東京大学本郷キャンパス 三四郎池、運動場、弥生門、図書館 (文京区本郷7-3 東大内)

・東京大学構内にある三四郎池、運動場、弥生門、また、図書館などについて説明。

(オ) 本郷追分 (文京区向丘1-1)

・旧中山道と旧岩槻街道の分岐点であり、作中では三四郎の下宿がこの付近に設定されていたことを説明。

(カ) 漱石旧居跡 (文京区向丘2-20-7)

・漱石が、イギリス留学から帰国し、1903年(明治36)から約3年間住んだ家であることを説明。ここで『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』が書かれた。また、漱石が住む以前には、森鷗外も住んでいた家である。現在は、愛知県犬山市の明治村に移築保存されている。

(キ) 鷗外記念本郷図書館 (文京区千駄木1-23-4)

・森鷗外が、1892年(明治25)から60歳で亡くなるまで30年間住んでいた家、観潮楼の跡にある図書館であることを説明。鷗外記念室が併設され、鷗外関係資料の展示も行われている。

(ク) 団子坂 (文京区千駄木2丁目・3丁目境)

・武蔵野台地と下町低地の境界であるとともに、作中にも描かれる明治時代の菊人形について説明。

(ケ) 夜店通り (藍染川)

・三四郎と美禰子が語り合った藍染川について説明。明治時代は蛍も飛んでいたといわれるが、現在は、暗渠になっている。

*JR日暮里駅 (解散場所)

(3) 漱石文学散歩 第2回 『それから』

①実施概要

- ・講 義 2002年10月23日(水)午後2時30分から4時まで
東京都江戸東京博物館 1階学習室2
- ・散 歩 2002年10月30日(水)午後1時30分から3時30分まで
- ・募集方法 往復はがきによる募集
- ・定 員 20名

・受講料 1,000円

②講義の内容

（ア）新聞小説（行吉正一）

『それから』の初出が「朝日新聞」であることについて、新聞掲載時に描かれた挿絵の作者、名取春仙（1886-1960）について、また、新聞小説の特徴を説明した。

（イ）『それから』の概要（行吉正一）

『それから』の登場人物とあらすじを説明した。

（ウ）家族の物語（行吉正一）

『それから』は、大学を出ても自活せず、親に扶養されて生活をしている長井代助が、親が持ってきた見合いを断り、親友の妻と結婚しようとする物語である。この物語の背景には、当時の家族制度の問題があった。明治民法下では、家督は、戸主からすべて長男に譲られるが、代助の父親は60歳を迎え、家督を長男の誠吾に譲ろうとしている。家督が誠吾に譲られると、誠吾には、弟の代助を扶養する義務が生じるが、その負担を減らすためには、代助を結婚させ自立させる必要がある。そこで、長井家は代助に結婚をせまる。代助の父親は、実業家で、自分の事業にとって有利になるような相手を選んでいるのである。おりしも、代助は30歳を迎え、結婚に親の同意が必要な最後の年齢となっている。家督の相続という家の制度が、代助の恋愛をテーマにした『それから』の背景にあったことを説明した。

また、当時、実際にあった日糖事件という疑獄事件を作品中に描き、代助の父親がこの事件に関わっていることを示唆し、読者の関心を引き付けようとしていることも説明した。

（エ）恋愛の物語（行吉正一）

・高等遊民

漱石の作品には、「高等遊民」がしばしば登場するが、『それから』の主人公長井代助も高等遊民である。高等遊民とは、高等教育を受けながらも、世俗を嫌い、労働に従事することなく生活する人物のことで、経済的に保証されていることが必要条件となる。日露戦争後、国家の目的が一応達成され、青年たちの関心は国家から個人の生き方へと向かう。そのような時代の中で生まれてきたのが高等遊民である。代助は、国家や社会を批判し、経済第一主義の父親や親友平岡に反発する。

・自己本位

漱石は、イギリスに留学していた時、文学とは何かという問題で苦しむ。本を読んでも、人に聞いても答えが見つからない状況の中、自分で文学というものを考えてゆくしかないと思い至る。このような「自己本位」の立場を得て、非常に強くなったと漱石は感じる。『それから』の長井代助は、高等遊民で、何事にも関わりを持たないで生きてきたが、親友の妻、三千代と共に生きようとしたとき、高等遊民から脱却し、いわば自己本位の立場に立つことになる。当時は、姦通罪という罪があった時代で、代助と三千代は、罪に問われる可能性も十分あったのである。それ

を承知で、三千代と共に生きる覚悟をした代助の生き方を説明した。

(オ) 神楽坂周辺 ～長井代助の住まい～ (田中実穂)

主人公の代助が住むのは、神楽坂の善国寺毘沙門天の先を左に折れた、通称わらだな藁店と呼ばれる場所である。藁店は、「牛込区(現・新宿区)第一繁華の市街」「全区の繁華をここにきわめたるものというべし」(『新撰東京名所図会 牛込区之部』)という繁華な神楽坂に面していながら、その入口から奥へと通じる地藏坂は細く上りの勾配も急であり、賑やか過ぎるということもない場所である。店も人も集まる神楽坂と付かず離れずの距離を保ちつつ、マイペースに日々を送る代助の姿を想像することができる。

『最新東京繁盛記』は、牛込区を、「旦那、細君、子供、下女、ゾロリゾロリと牛込的に歩く。牛込的な下駄のすり減り方は独特だ。この区の間人ほど、悠々としてゆっくりと、暇多く、暮らしに困らず余裕があるように見えるものはない」とし、あたかも高等遊民として過ごす代助を描写したかのように記録している。

神楽坂を「繁華の市街」にした理由には、善国寺毘沙門天の存在とともに、飯田橋停車場(現・JR飯田橋駅東口付近)や牛込見附停留所(現・神楽坂下交差点付近)という交通の便の良さもあった。代助がたまに顔を出す青山の実家へは、赤坂見附で乗り換えるだけであり、実家とは近からず遠からずの、物理的・心理的な関係を設定するうえでも、神楽坂の地が選ばれたのであろうか。藁店や神楽坂の地理的特徴が、代助の住まいの設定に反映されていることを説明した。

(カ) 小石川伝通院周辺 ～平岡夫妻の住まい～ (田中実穂)

平岡夫妻の住む小石川区(現・文京区)伝通院の辺りは、代助のいる神楽坂とは異なり、「なお静かであった。たいていな家は灯影さえもらさなかつた。」(17章)という場所である。その住まいも、「中流社会が次第次第に切り詰められていくありさまを、住宅のうえによく代表した、もっとも粗悪な見苦しき構えであった」(6章)とされ、平岡夫妻を知る代助が、「暗々と連想せずにはいられない」ほどの慎ましやかな住宅である。この小石川区には千川という水資源があることから、工場や宅地が増加していったが、地価は十五区の中で一番安かった。また、平岡夫妻の住まいが設定された小石川表町は、区内で一番標高のある場所だが、伝通院の前には停留所があるなど、決して交通に不便ではない一方、『新撰東京名所図会 小石川区之部』によれば、物資の供給は十分ではなく、日用品の購入であっても本郷四丁目か神楽坂までの遠出を強いられていた。関西での仕事に失敗し、経済的に困難のまま東京に戻った平岡夫妻が住まざるを得ない場所として、小石川の地が設定された理由を説明した。

平岡夫妻の住む小石川から、代助の住む神楽坂へは、金剛寺坂を下り、江戸川を渡って筑土八幡神社の脇から、神楽坂へ通じる坂道(現在の本多横丁か)を上るという距離と手間を要する。特に金剛寺坂は、「最も高燥なり」の地から、江戸川に向かって一気に下りていく勾配の急な狭い坂道であり、舗装もされていない当時は、さぞかし歩行に難儀をしたと考えられる。代助を慕う三千代が神楽坂に行くために坂を下りる時には、傾斜の勢いに心身を任せたかもしれず、自宅に戻るために坂を上る時には、立ちはだかる坂の勾配に足元はもちろん、心持ちも重く感じたで

あろうことを、現代の坂の様子からも読み取れることを説明した。

(キ) 青山周辺 ～長井本家の住まい～（田中実穂）

(オ) で述べた通り、代助の実家は青山にある。その家は西洋造りで、内部の装飾などは代助がデザインしたものを専門家が造作したものであり、また、そこに住む兄の家族は、バイオリンを習い、ピアノを嗜むなど、経済的にもかなり余裕のある生活ぶりが描かれる。実業家の父と兄の一家が住む青山周辺は、『新撰東京名所図会 赤坂区・麻布区之部』によると、参詣者で賑わう豊川稲荷もあり、地域全体では華族や大小官吏の家が多いとされる。こうした場所の特性によって、青山が代助の実家として設定されたことを説明した。

③散歩の行程（別添地図参照）

主人公の代助を慕う三千代は、小石川の自宅から、弱い体を押して、代助の家のある神楽坂へ幾度も通う。散歩ではその行程を歩いた。小石川の伝通院から急な金剛寺坂を江戸川に向かって下り、また、坂を上り、代助の家が設定された神楽坂の藁店^{わらだな}までを歩いた。

現在でも、この行程は坂の上り下りが急であり、舗装もされていない当時、そこを何度も往復した三千代の代助への強い想いがしのばれた。また、江戸川は当時、桜の名所であったことが作品中に書かれており、現在も江戸川公園は桜の名所であるが、高速道路が江戸川の上を走り、当時の面影は消えていた。

文学散歩の具体的な行程は以下の通りである。

(ア) 礒川公園（集合場所）

- ・礒川＝小石川＝千川の存在と、その両側を坂に挟まれている地形について説明。

(イ) 富坂

(ウ) 伝通院（文京区小石川3-14-6）

- ・徳川家康の母、於大の方を葬った徳川家の菩提寺としての歴史と、作中にも焼け跡として描かれる1908年（明治41）の火災について説明。

(エ) 法蔵院

- ・伝通院の塔頭であることを説明。夏目漱石は、この法蔵院に、1894年（明治27）、27歳のとき間借りしていた。

(オ) 金剛寺坂

- ・急勾配の坂に示される、小石川から江戸川に向かう地形について説明。

(カ) 江戸川 中之橋

- ・明治時代に花見の名所であったことを説明。

(キ) 同潤会江戸川アパート

- ・関東大震災後にできた同潤会アパートについて説明。

(ク) 筑土八幡神社 (新宿区筑土八幡町2-1)

- ・牛込の産土神としての歴史、新宿区内最古の鳥居 (1726年建立) について説明。

(ケ) 本多横丁・神楽坂

(コ) 善国寺毘沙門天 (新宿区神楽坂5-36)

- ・1793年 (寛政5) に神楽坂に移転し、神楽坂発展の契機となった善国寺、および作中にも登場する縁日について説明。

(サ) 地蔵坂・藁店^{わらだな}～光照寺 (新宿区袋町15)

- ・代助の家があると想定される場所。藁店の由来、地蔵坂上の光照寺 (牛込氏居城址) について説明。

* 光照寺にて解散

(4) 漱石文学散歩 第3回 『門』

① 実施概要

- ・講義 2003年10月23日 (木) 午後2時から3時30分まで
東京都江戸東京博物館 1階学習室1
- ・散歩 2003年10月29日 (水) 午後1時30分から3時30分まで
- ・募集方法 往復はがきによる募集
- ・定員 20名
- ・受講料 1,000円

② 講義の内容

(ア) 『門』の概要 (行吉正一)

- ・新聞小説、初版本

『門』の初出が「朝日新聞」であること、『門』の初版本について、新聞小説の特徴について説明した。

- ・物語の概要

『門』の登場人物とあらすじ、また、物語が展開する日露戦争当時の時代背景を説明した。

(イ) 崖の下と上の物語 (行吉正一)

- ・崖の下と崖の上・崖の下と崖の上の対比・罪と罰・宗助とお米の愛

『門』は、『それから』の続編で、宗助が、友人の妻 (お米) を奪った後の物語として描かれている。彼らは、自分たちの愛を貫いた代わりに、世間から隠れるようにして崖の下の質素な借家に暮らすことになった。そこでは、宗助の弟の扶養問題が起こったり、お米のかつての夫が現れそうになったり、宗助が不安から逃れるために参禅をこころみるが失敗に終わったりと、外見的には静かな生活だが、様々な事件が起こってゆく。一方、崖の上では、大家一家が、多くの子供に恵まれ、豊かな生活を営んでいる。実は、お米は、宗助の子の出産に三度失敗し、それが、自分たちの結婚への罰ではないかと思っているのである。このような中で、宗助とお米は、お互い理解

しあえない部分を持ちながらも、一对の固く結ばれた夫婦として生きていく。『門』は、崖の下という象徴的な場所で展開される愛と罪の物語であることを説明した。

(ウ)『門』の舞台（田中実穂）

・「静かな町」～ここに住む理由～ 牛込区東榎町

主人公の宗助と、お米の夫婦が住まう崖下の家は「静かな町」（1章）にあるが、前作の『三四郎』『それから』のように、具体的な町名などの記載は全くなく、あえてその居場所を明確にしないように描かれている。手がかりとなるのは、崖の下であることや、「電車の終点から歩くと二十分もかかる山の手の奥だけあって」（3章）という場所、勤務先への乗り換えに駿河台下の停留所を利用することであり、以上の描写から、二人の住まいは牛込区東榎町（現・新宿区東榎町）と推定されることを説明した。

住まいの場所は特定されないが、その中の様子は細かく描かれる。茶の間には長火鉢・鉄瓶・炭・炭取り・真鍮の火箸・置炬燵・ランプ・箆笥があり、隣の床の間には「変な軸」と花活がある。食事や就寝をする座敷や、お米のいる六畳の間も同様に詳細に描かれ、当時の生活道具をことさら集約させたかのような観がある。あたかも彼らの世界は外にはなく、あるいは外に持つことは許されず、崖下の家の中だけに許されているかのようである。宗助は、そのことを自覚しており、「ひっきょう自分は東京のなかに住ながらついで東京というものを見たものがないんだという結論に到着する。」（2章）

宗助、お米夫婦が住む家の南側には「廂にせまるような勾配の崖」（1章）があるが、彼らが住むと想定した東榎町に隣接して、かつての酒井若狭守上屋敷地の境界線もそのままに、矢来町（現・新宿区矢来町）が広がっている。崖の上の住人として登場する坂井は「旧幕の頃何とかの守と名乗ったもので、此の界限では一番古い門閥家なのだそうである」（9章）と表現されていることから、酒井若狭守→坂井と設定されたことは想像に難くない。

・「にぎやかな町」～家へ帰る前に～ 神田

大手町の内務省に勤めていた宗助は、その行き帰りに駿河台下の停留所で乗り換えをする。駿河台下から西の神保町にかけては、通りに沿って店が立ち並び、『新撰東京名所図会 神田区』には、勸業場をはじめ、飲食店、寄席、書店、学校など計101の商いや施設が記録されている（そのうち約18%は書店）。作中にも「にぎやかな町」（2章）に始まり、窓ガラスの向こうに洋書が美しく並べられている様子や、年末に楽隊が繰り出していることなどが描かれる。年の瀬を迎え、ますます賑やかさを増す町を通り過ぎて、住まいのある「静かな町」に帰って行く宗助の姿を通して、当時の神田について説明した。

③散歩の行程（別添地図参照）

主人公の家があると想定される東榎町界限を中心に歩いた。東榎町と矢来町の境には、実際に急な崖があり、その上と下に住宅が立ち並んでいる。そこが、主人公たち、宗助夫婦の家のモデルというわけではないが、崖のある地形の実例の一つとして見た。「静かな町」と形容された当時の町も、今

は広い早稲田通りの通る住宅街となっているが、残っている崖の様子から、宗助たちの生活をしのぶことができた。

散歩の行程としては、JR飯田橋駅から神楽坂を登り、東榎町を通り、漱石公園（漱石が住んだ家の跡にある公園）、漱石生誕の地までを歩いた。

文学散歩の具体的な行程は以下の通りである。

(ア) JR飯田橋駅西口（集合場所）

(イ) 神楽坂

(ウ) 善国寺（新宿区神楽坂5-36）

・1793年（寛政5）に現在地に移転、神楽坂が門前町として発展したことを説明。

(エ) 赤城神社（新宿区赤城元町1-10）

・牛込の総鎮守である同社の歴史、ならびに境内から見た土地の高低差（江戸川に向かって土地が低くなる）を説明。

(オ) 矢来町一带

・現在の矢来町の範囲が、酒井若狭守上屋敷の境界線と一致することを説明。

(カ) 牛込天神町交差点

・1910年（明治43）の洪水について説明。また、交差点北側の道路（江戸川橋通り）が宗助の通勤路と推定されることを説明。

(キ) 東榎町（新宿区東榎町）

・東榎町に、宗助お米夫婦の家が設定されていることを説明。

(ク) 新宿区立漱石公園（漱石山房）（新宿区早稲田南町7）

・漱石が1907年（明治40）から亡くなる1916年（大正5）まで住んだ家、漱石山房があったことを説明。

(ケ) 夏目漱石誕生の地（新宿区喜久井町1）・夏目坂

・漱石は、江戸の牛込馬場下一帯を治める名主、夏目小兵衛直克と千枝の子として生まれたことを説明。また、生家の前を通る夏目坂は、漱石の父が付けた名であることを説明。

* 営団地下鉄早稲田駅（解散場所）

(5) 漱石文学散歩 第4回 『彼岸過迄』

①実施概要

- ・講 義 2007年10月12日（金）午後2時から3時30分まで
東京都江戸東京博物館 1階学習室1
- ・散 歩 2007年10月19日（金）午後1時30分から3時30分まで
- ・募集方法 往復はがきによる募集
- ・定 員 30名
- ・受講料 2,500円（2回分）

②講義の内容

（ア）『彼岸過迄』の概要（行吉正一）

・新聞小説

『行人』の初出が「朝日新聞」であることについて、初版本について、また、新聞小説の特徴について説明した。

・1910年（明治43）、1911年（明治44）の漱石

1910年（明治43）、漱石はいわゆる「修善寺の大患」を経験する。転地療養で行っていた修善寺温泉で大量の吐血をし、約30分間仮死状態になったが、奇跡的に回復する。翌年の1911年（明治44）には、文部省から文学博士号授与の通知が来るが、漱石はそれを固辞する。また、この年、五女ひな子が急死する。このような状況のあと発表されたのが『彼岸過迄』である。

・『彼岸過迄』の内容

『彼岸過迄』の登場人物とあらすじについて説明した。

（イ）都市の迷路、家族の迷路（行吉正一）

・都市の迷路

明治時代以降、東京では、地方からの労働者や学生の流入により人口が増加し、いくつもの繁華街ができていった。『彼岸過迄』で中心的な役割を果たす小川町も神田区第一の繁華街として栄えた場所である。そこでは、市電が交差し、お互い見知らぬ多くの人々が移動し、さながら都市の迷路の様相を呈していた。この物語では、この小川町で、登場人物たちによる一種の「探偵ごっこ」が演じられるが、漱石は、探偵に強い関心を持っていた。探偵は、お互い見知らない人々が多く住む都市の中だからこそ成立する職業であるが、漱石は探偵という職業は、スリや泥棒、強盗の一族で、下等な職業として軽蔑していた。しかし、その一方で、『吾輩は猫である』のように、一種の探偵のような猫を主人公として登場させてもいる。

・家族の迷路 — 須永と千代子 —

主人公の須永市蔵は、父親と小間使いとの間にできた子で、父親の妻は、それと承知で、須永を自分の子供として育てている。その出生の秘密を、須永は、大学生の頃、叔父の松本から聞く。そのような須永と従姉にあたる千代子の恋愛はうまく進展しない。須永は、千代子に対して甘えの気持ちを持っていたのか、千代子の本気で愛していないにもかかわらず、千代子と他の青年との仲を嫉妬してしまい、千代子はそのことに対して怒ってしまう。複雑な家族関係を持つ須永が陥った恋愛感情の迷路の世界、それが『彼岸過迄』ともいえる。

（ウ）人が住む町（田中実穂）

・田川敬太郎の本郷台町

・須永市蔵の小川町

主人公である東京帝国大学卒業生の須永市蔵は小川町に住み、その親友の田川敬太郎は大学のある本郷に住んでいる。

須永の住む小川町は、江戸時代に武家地として開発されたが、明治時代には町家が増加し、市

電の乗換地点でもあることから「本町を以て区内第一の繁華地と為す」(『新撰東京名所図会 神田区』)であった。小川町から神保町にかけての一带に店が立ち並ぶ様子は、『門』に詳しく描写されている。また、市蔵の叔父に人探しを依頼された敬太郎は、指定された小川町の停留所に赴くが、複数の路線が交差する小川町は、東・西・南と3箇所の停留所があり、電車が来るたびに右往左往を余儀なくされる。以上の描写を踏まえて、当時の市電の路線と、そこに至るまでの路面電車の変遷を説明した。

また、敬太郎の住む本郷台町は『東京風俗志』『新撰東京名所図会 本郷区』によれば、「台町」という町名の通りに土地の標高は高く、住民の大半は「旅館下宿業及寄宿舍」を営んでいる。

③散歩の行程 (別添地図参照)

『彼岸過迄』の主人公、須永市蔵の住む小川町を中心とした地域を歩いた。小川町は、市電の路線が交差する賑やかな場所であったところから、市蔵の親友の田川敬太郎が、人探しを頼まれ迷ってしまう場所としても描かれている。

現在でも、靖国通り、本郷通りなど大きな道路が走り、3つの地下鉄が乗り入れるなど、交通の要衝ではあるが、当時の町並みがあるまま残っているわけではなく、その様子を直接イメージすることは容易ではなかった。ただ、交差点から内側に入ると存外静かで、内省的な市蔵の住んだ家を彷彿とさせた。

なお、小川町界隈の漱石に関する場所や歴史的史跡も巡った。

文学散歩の具体的な行程は以下の通りである。

(ア) JR御茶ノ水駅聖橋口 (集合場所)

(イ) 神田川・聖橋

・江戸時代における神田川開削と、1927年(昭和2)に架橋された聖橋の名の由来について説明。

(ウ) 井上眼科 (千代田区神田駿河台4-3)

・漱石が、青年の頃、トラホームで井上眼科に通い、美しい女性に出会ったエピソードなどを説明。

(エ) ニコライ堂 (東京復活大聖堂) (千代田区神田駿河台4-1-3)

・ニコライ堂の歴史について説明。

(オ) 東京物理学校跡地 (千代田区小川町二丁目)

・東京物理学校の歴史について説明。漱石の『坊っちゃん』の主人公、坊っちゃんの卒業した学校であることも説明。

(カ) 小川町交差点

・小川町停留所の場所と、路面電車の乗り換えにより混雑した当時について説明。

(キ) 神田錦町

・1891年(明治24)に建てられた集会演説貸席場(のちに映画館)の錦輝館について説明。

(ク) 学士会館（千代田区神田錦町3-28）

- ・1843年（天保14）、この地にあった上野安中藩上屋敷で生まれた新島襄について説明。

(ケ) 神田神保町・岩波書店（千代田区一ツ橋2-5-5）

- ・神田神保町の古書店街について、また、岩波書店の歴史について説明。『こころ』や『夏目漱石全集』が岩波書店から出版されるなど、漱石と岩波書店との関連も説明。

(コ) お茶の水小学校（旧 錦華小学校）（千代田区猿楽町1-1-1）

- ・漱石は、錦華小学校でも学んだことを説明。

(サ) 山の上ホテル（千代田区神田駿河台1-1）

- ・山の上ホテルの歴史を説明。

*JR御茶ノ水駅御茶ノ水口（解散場所）

(6) 漱石文学散歩 第5回 『行人』

①実施概要

- ・講 義 2008年11月7日（金）午後2時から3時30分まで
東京都江戸東京博物館 1階学習室2
- ・散 歩 2008年11月14日（金）午後1時30分から3時30分まで
- ・募集方法 往復はがきによる募集
- ・定 員 36名
- ・受講料 2,500円（2回分）

②講義の内容

(ア) 『行人』の概要（行吉正一）

- ・初出と初版

『行人』の初出が「朝日新聞」であることについて、初版本について、また、新聞小説の特徴について説明した。

- ・概要

『行人』の登場人物とあらすじを説明した。

(イ) 『行人』を読む（行吉正一）

- ・「家」の制度

明治時代は、当時の民法における家制度により、「家」の維持が大きな比重を占めた時代であり、結婚は愛情によらず、家の維持という観点から考えられていた。そのような時代背景のもと、主人公の長野一郎は直と結婚し、そして、妻の直の心をつかみきれずに苦しむ。

- ・ある男女の物語

見合い結婚により家制度が維持され、男女の愛情が確認しづらい状況のなかで、男女の真の愛情を示すエピソードが語られる。一つは、一郎の弟、二郎の友人、三沢が語る物語で、離婚され

精神を病んだ女性が、三沢が外出するたびに「早く帰ってきてちょうだいね。」と言うようになった話。これを一郎は、精神を病んだからこそ、ようやく本心を言えるようになったのではないかと考える。もうひとつは、パオロとフランチェスカの物語（フランチェスカが、夫の弟、パオロと恋に落ちる物語）。

・夫婦の苦悩

『行人』は、一郎が妻の心をつかみきれず苦しむ物語であるが、妻の直も夫の心をつかみきれず苦しむ。一郎は、妻の自分への愛情が信じきれず、弟の二郎に妻の貞操を確かめるため、妻と一緒に外泊してくれないかと頼む。また、妻の直は、自分は夫の一郎を一番好いているが、一郎に好かれておらず、そのため「腑抜け、魂の抜け殻」になってしまったと二郎に言う。一郎は、この物語の最後に、親友のHさんと旅に出て、一時期でも癒されるが、直にはそのような機会が与えられていない。

(ウ) 物語の舞台を訪ねて (田中実穂)

・関西への旅

下女の貞の見合いのため、長野一家は東京から大阪に赴き、そこからまた、避暑のため和歌の浦に行くことになった。

大阪から和歌の浦へは、1885年（明治18）に日本で初めて純民間資本により開通した南海電気鉄道を利用する。和歌の浦に到着した一行は、真言宗の古刹であり、景勝地として名高い紀三井寺などを観て回る。

『日本漫遊案内』では、名草山の中腹に位置する同寺について、「石燈長く本堂に通し、札納堂より望めば、和歌浦は一望指掌の間にあり。松の青さ、浪の白さ、人をして殆ど去るに忍びざらしむ。」と、眺望の素晴らしさを謳っている。作中では、二郎の母親が高い石段に難儀をしながら参拝をする様子も描かれる。

一家の行動を通して、観光地としての当時の和歌山と、東京から大阪を経て同地へ向かうための交通網について説明した。

・番町という場所

主人公の一郎など家族が住んでいるのは、麴町区番町（現・千代田区一番町～六番町）である。番町の名は、1592年（文禄元）に江戸城防衛を目的とした大番六組が配置されたことに由来する。

市ヶ谷御門（現・JR市ヶ谷駅付近）から、番町皿屋敷の伝説を伝える帯坂を上ると、表六番町通り（二七通り）に出る。表六番町通りから東郷坂を下ると、裏六番町通りとなる。番町一帯は、東西を貫く通りと、それを南北に結ぶ坂がいくつも交差しており、そこにあった旗本屋敷は背後で隣接する敷地との間に高低差を設けて建てていたことなど、凹凸の台地上における土地利用について説明した。

明治時代に生きる一郎の家は、二階建ての建物に、食堂や書斎、兄妹それぞれの部屋を有し、また「公の務めを退いた」父を、貴族院の議員と会社の監査役が訪ねて来ることから、経済的に余裕のある暮らしぶりがうかがえる。高燥かつ交通の便が良く、華族や上級役人の居宅が集中

していたという事実を踏まえ、一家の居住地として番町が設定されたのだろう。作中における一家の描写をもとに、番町の地理と歴史について説明した。

③散歩の行程（別添地図参照）

『行人』の主人公、長野一郎一家が住むと設定されている番町界隈を歩いた。江戸時代は旗本たちの屋敷地で、明治時代には華族や高級官吏などの住んだ地域である。妻との関係を築けない一郎の苦悩が展開された場所として、漱石は、そのような番町を選んだのである。現在においては、当時の町並みそのものはなくなっているが、高級住宅街という性格は残っており、作品当時の様子を想像することができた。

また、番町は、明治時代以降、多くの文学者が住んだ一種の文士村でもあったことから、文学者ゆかりの地も多く訪ねた。

文学散歩の具体的な行程は以下の通りである。

(ア) JR市ヶ谷駅改札口前（集合場所）

(イ) 内田百閒 旧宅跡（千代田区五番町12）

・夏目漱石と交友のあった内田百閒について説明。

(ウ) 寺田寅彦 旧宅跡（千代田区四番町8）

・夏目漱石と交友のあった寺田寅彦について説明。

(エ) 東郷元帥記念公園（東郷平八郎 旧宅跡）（千代田区九段南1-2-2）

・日露戦争時に連合艦隊司令長官だった東郷平八郎（1848～1934）について説明。

(オ) 東郷坂・行人坂・南法眼坂

・それぞれの坂名の由来について説明。

(カ) 「明星」発祥の地（千代田区三番町22）

・明治時代の文学誌「明星」について説明。

(キ) 平塚らいてう 生誕地（千代田区九段南3-5）

・平塚らいてうについて説明。

(ク) 和学講談所跡（塙保己一 旧宅跡）（千代田区三番町24）

・『群書類従』を編纂した塙保己一（1746～1821）と、1793年（寛政5）に幕府により設置を許可された和学講談所について説明。

(ケ) 永井荷風 旧宅跡（千代田区三番町6）

・永井荷風について説明。

(コ) 大塚楠緒子 生誕地（千代田区三番町8）

・夏目漱石とも交友のあった大塚楠緒子について説明。

(サ) 二松学舎大学（千代田区三番町6-16）

・夏目漱石が通ったこともある二松学舎大学について説明。

(シ) 千鳥ヶ淵

・「千鳥」の名前、および桜の名所としての由来を説明

(ス) 高浜虚子 旧宅跡 (千代田区一番町2)

・夏目漱石と交友のあった高浜虚子について説明。

(セ) 与謝野鉄幹・晶子 旧宅跡 (千代田区四番町11、および四番町9)

・与謝野鉄幹・晶子について説明。

(ソ) 明治女学校跡

・明治女学校について説明。

(タ) 菊池寛 旧居跡

・菊池寛について説明。

(チ) 有島武郎・有島生馬・里見弴 旧居跡 (千代田区六番町3)

・有島武郎・有島生馬・里見弴について説明。

(ツ) 泉鏡花 旧宅跡

・泉鏡花について説明。

(テ) 島崎藤村 旧宅跡 (千代田区六番町11)

・島崎藤村について説明。

(ト) 四ッ谷御門跡 (千代田区六番町)

・江戸城の外郭門として甲州街道の起点に設置された門と街道の特徴、「四ッ谷」の由来について説明。

*JR四ッ谷駅麴町口 (解散場所)

(7) 漱石文学散歩 第6回 『こころ』

①実施概要

- ・講 義 2009年11月6日 (金) 午後2時から3時30分まで
東京都江戸東京博物館 1階会議室
- ・散 歩 2009年11月20日 (金) 午後1時30分から3時30分まで
※13日 (金) が雨天のため、20日 (金) に延期。
- ・募集方法 往復はがきによる募集
- ・定 員 36名
- ・受講料 2,500円 (2回分)

②講義の内容

(ア) 『こころ』の概要 (行吉正一)

・初出と出版

『こころ』の初出が「朝日新聞」であることについて、初版本について、また、新聞小説の特

徴について説明した。

・概要

『こころ』の登場人物とあらすじを説明した。

(イ) 『こころ』を読む（行吉正一）

・他者への不信・家制度と財産の物語

明治民法における家制度では、家督は長子単独相続されるが、「先生」は、若くして父親を亡くし、家督を相続する。しかし、相続した財産の多くを叔父にだまし取られてしまう。「先生」の、叔父を含め、他者への不信の背景に、家制度があったことを説明した。

・桎梏からの逃走・若者たちの物語

青年時代の「先生」や「K」は、家制度に桎梏を感じ、その束縛から逃げようとしたことを説明した。

・自己への不信・愛の物語

『こころ』は、主人公の「先生」が、「お嬢さん」への愛情のため、親友の「K」を自殺に追いやったと思い、自責の念にかられる物語である。「先生」は、他者だけでなく、自分自身を信じられなくなってしまい、絶望に陥ってしまい、最後には自殺をしてしまう。

・Kのこと、静のこと・脇役たちの物語

「K」が自殺したのは、失恋のためではなく、彼自身の抱える「淋しさ」のためだったかもしれない。また、先生の妻、静は、「先生」が、「K」の自殺について何も語らないことにより、「先生」と本質的なところで何も共有できず、不幸な結婚生活であったかもしれないことを説明した。

(ウ) 物語の舞台を訪ねて（田中実穂）

・鎌倉の海岸

「私」と「先生」を鎌倉に運んだ鉄道と、出会いの背景となる海水浴場の様子について説明した。

「私」が「先生」に初めて出会うのは、鎌倉の海水浴場である。東京に住む二人が鎌倉に行くためには、1889年（明治22）に開通した横須賀線を利用する。横須賀線は、海軍の鎮守府の横須賀設置に伴い敷設された路線であり、横浜－横須賀間を1時間30分で運転した。また、鎌倉から相模湾に沿った地域には、1902年（明治35）に江ノ島電気鉄道株式会社による敷設工事が始められ、1910年（明治43）に藤沢－鎌倉間の全線が開業する。

鎌倉の海水浴場は『日本漫遊案内 東部』に「其海岸由比ヶ浜は、海水浴に適し、附近には都人の別荘を構ふる者多く、民家は室を貸して避暑客の便を謀る」とある通り、東京からの大勢の客を集めていた。作中にも「この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た男や女で砂の上が動いていた。ある時には海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしていることもあった。」（上 先生と私）とその混雑ぶりが描かれる。

・本郷・小石川

「先生」と「K」が在籍した東京帝国大学は、本郷区本富士町（現・文京区本郷）にあり、本郷区内で一番土地の高い場所にある。小石川に下宿する二人は、大学の行き帰りにいくつもの坂

を上り下りすることになる。大学へは、善光寺坂を下って白山通りに出て、菊坂を上るのが最短ルートであるが、物語には、小石川区（現・文京区）内におけるさまざまな道が登場する。

特に東京砲兵工廠前の道は、雨が降らない日には馬車の往来による塵が雲のごとく立ち上がり、またたく間に人の姿が見えなくなるほどであったが、雨が降り出すと、区内で一番土地が低い場所であるだけに、たちまちに泥だらけになり、歩行が難儀になるほどであった。泥だらけの道は、「下 先生と遺書」で語られる、親友の「K」と、自分が想いを寄せる「お嬢さん」が連れ立っているのに出くわしてしまった先生の嫉妬を表現しているかのようでもある。

上記の場面紹介とあわせて、本郷と小石川の地理と歴史、作中に現れる東京帝国大学の制度（九月の始業、角帽と制服の制定）についても説明した。

・雑司ヶ谷の墓地

「K」が葬られ、作者である漱石も眠る雑司ヶ谷霊園の歴史は、1872年（明治5）に、明治政府により神葬地として、東京府内の五ヶ所が選定されたことに始まる。その背景には、廃仏毀釈政策として、埋葬地を寺院の墓地から切り離そうとする動きがあった。

『東京風俗志』によれば、明治30年代の埋葬は「今や市内の寺院墓地にて営むことを禁じたれば、共葬墓地にてするか、もしくは市外の寺院墓地に託せざるべからず。共葬墓地は（中略）近郊にては染井、亀戸、雑司ヶ谷等にあり」という状況であった。雑司ヶ谷の墓地は面積28,978坪、北側に銀杏の大樹があった。また、郊外にあるため、今なお埋葬には余裕の場所があると『新撰東京名所図会 西郊の部』に記されている。その樹の下を「K」の月命日に必ず通る「先生」と「私」の会話とあわせて、墓地についての概要を説明した。

③散歩の行程（別添地図参照）

『こころ』では、主人公の「先生」とその親友「K」が通っていた東京帝国大学（現在の東京大学）から、下宿があったと設定されている小石川までを歩いた。また、「K」が葬られたとされ、漱石自身も眠る雑司ヶ谷霊園にも行った。

小石川界限には当時の面影は残っていないが、主人公たちが、下宿と東京大学との往復に通ったとされた坂道は現在も残っており、そこから当時の様子を想像した。雑司ヶ谷霊園は、現在も静かな場所、で、「K」や「先生」の自死についても思いをはせた。また、漱石文学散歩の最終回として、漱石の墓にも参った。

文学散歩の具体的な行程は以下の通りである。

(ア) 東京大学本郷キャンパス赤門前（集合場所）（文京区本郷7-3-1）

・「先生」たちの通った大学、東京帝国大学の歴史を、加賀藩上屋敷や赤門の成り立ちも含めて説明。

(イ) 蓋平館別荘（文京区本郷6-10-12 現・旅館太栄館）

・石川啄木が住んだ下宿、蓋平館別荘について説明。

(ウ) 源覚寺（こんにゃく閻魔）（文京区小石川2-23-4）

・源覚寺について説明。

(エ) 善光寺坂（文京区小石川3-17-8）

・善光寺について説明。

(オ) 沢蔵司稲荷・慈眼院（文京区小石川3-17-12）

・沢蔵司稲荷・慈眼院について説明。

(カ) 幸田露伴旧居（小石川の蝸牛庵）（文京区小石川3-17-16）

・幸田露伴の旧居（小石川の蝸牛庵）について説明。

(キ) 伝通院（文京区小石川3-14-6）

・「先生」が「K」と下宿した場所を、伝通院付近と想定し、伝通院について説明。

(ク) 富坂

・富坂（春日通り）について説明。

(ケ) 東京砲兵工廠跡（文京区後楽1-3-61 現・東京ドームシティ）

・「先生」や「K」、「お嬢さん」たちが歩いた場所として、東京砲兵工廠付近を想定し、東京砲兵工廠について説明。

*東京メトロ後楽園駅から東池袋駅へ、地下鉄南北線 飯田橋駅経由で移動。

(コ) 雑司ヶ谷霊園（豊島区南池袋4-25-1）

・「K」が葬られたとされる、現在の雑司ヶ谷霊園について説明。

(サ) 夏目漱石の墓

・漱石の墓について説明。

*東京メトロ東池袋駅（解散場所）

おわりに

漱石文学散歩を全6回にわたり行い、その記録と共に、文学散歩について考えたことを記した。第1回の漱石文学散歩『三四郎』を始めたのは、10年前のこととなる。試行錯誤を繰り返しながら行ってきたが、受講者にとって、この文学散歩が、少しでも漱石の作品を理解、鑑賞する手助けとなっていればと願うものである。

今回、漱石文学散歩の記録を報告するにあたって、野田宇太郎の文学散歩観の確認、他館の文学散歩の調査などを行い、文学散歩について考えてみたが、文学散歩は、文学だけではなく、地域の地理や歴史にも関わる総合的な学習であると痛感した。また、ここで記した文学散歩に関する考察は決して十分ではなく、今後もさらに文学散歩の意義や課題などを検討してゆく必要があると考える。文学散歩の意義や課題を整理し、その目的を明確にすることで、参加者の学習効果も上がり、博物館の教育普及事業の一つとして、文学散歩がしっかりと位置づけられるであろう。また、文学研究の面でも、文学散歩がその方法の一つとして確立されれば、文学作品の魅力はさらに深まってゆくだろう。今後も、さまざまな

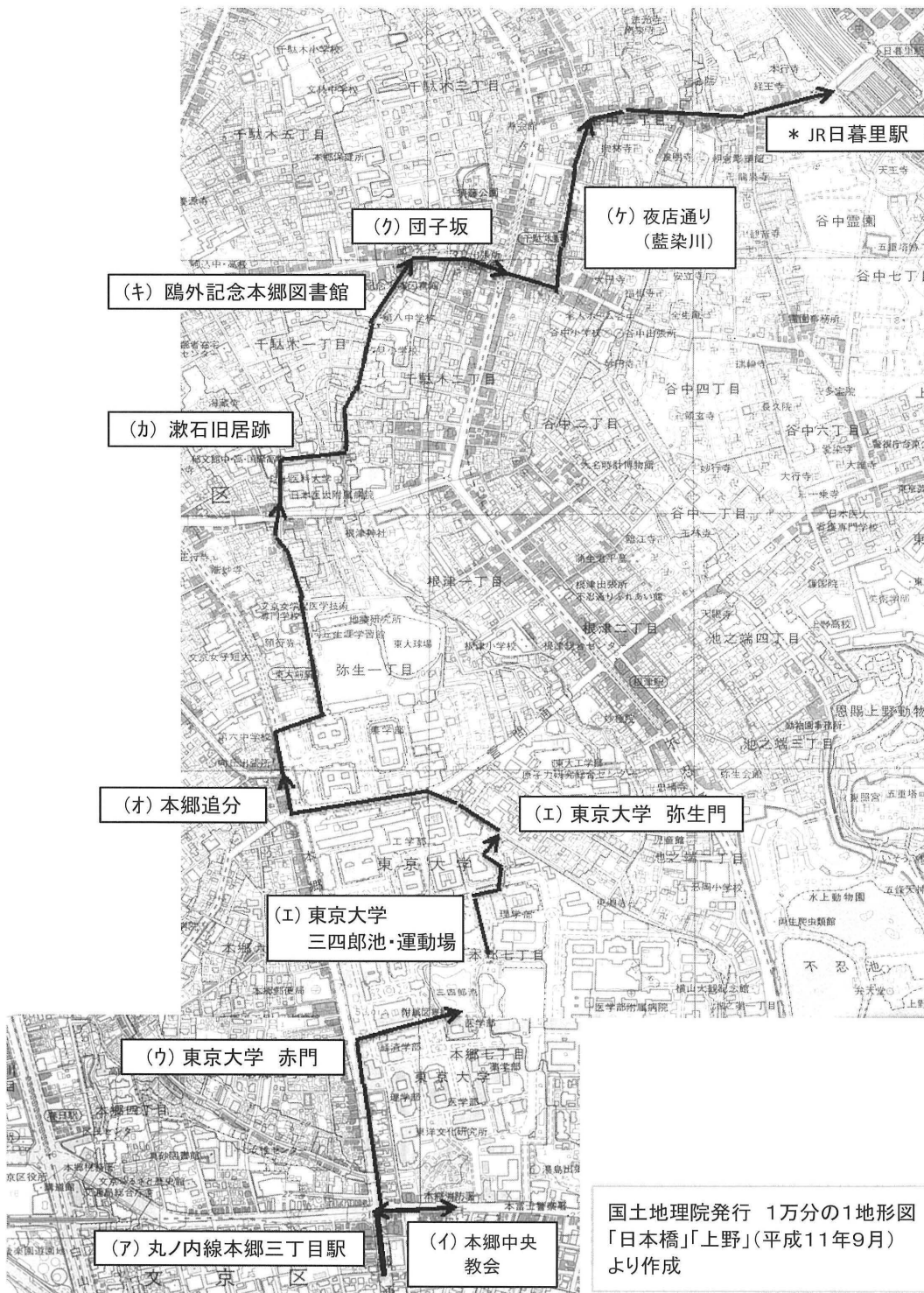
文学散歩を行うことによって、文学作品の魅力を明らかにすると共に、多くの方に作品の魅力、文学散歩の魅力を伝えてゆきたいと思う。

なお、最後に、野田宇太郎に関して様々な資料の提供と助言を与えてくださった、野田宇太郎文学資料館の皆様には感謝の意を表します。

また、各館の文学散歩の調査に対して、ご協力をいただいた、田端文士村記念館の黒崎力弥氏、長谷川恵理子氏、世田谷文学館の瀬川ゆき氏、町田市民文学館ことばらんの山端穂氏、神林由貴子氏にも、感謝の意を表します。

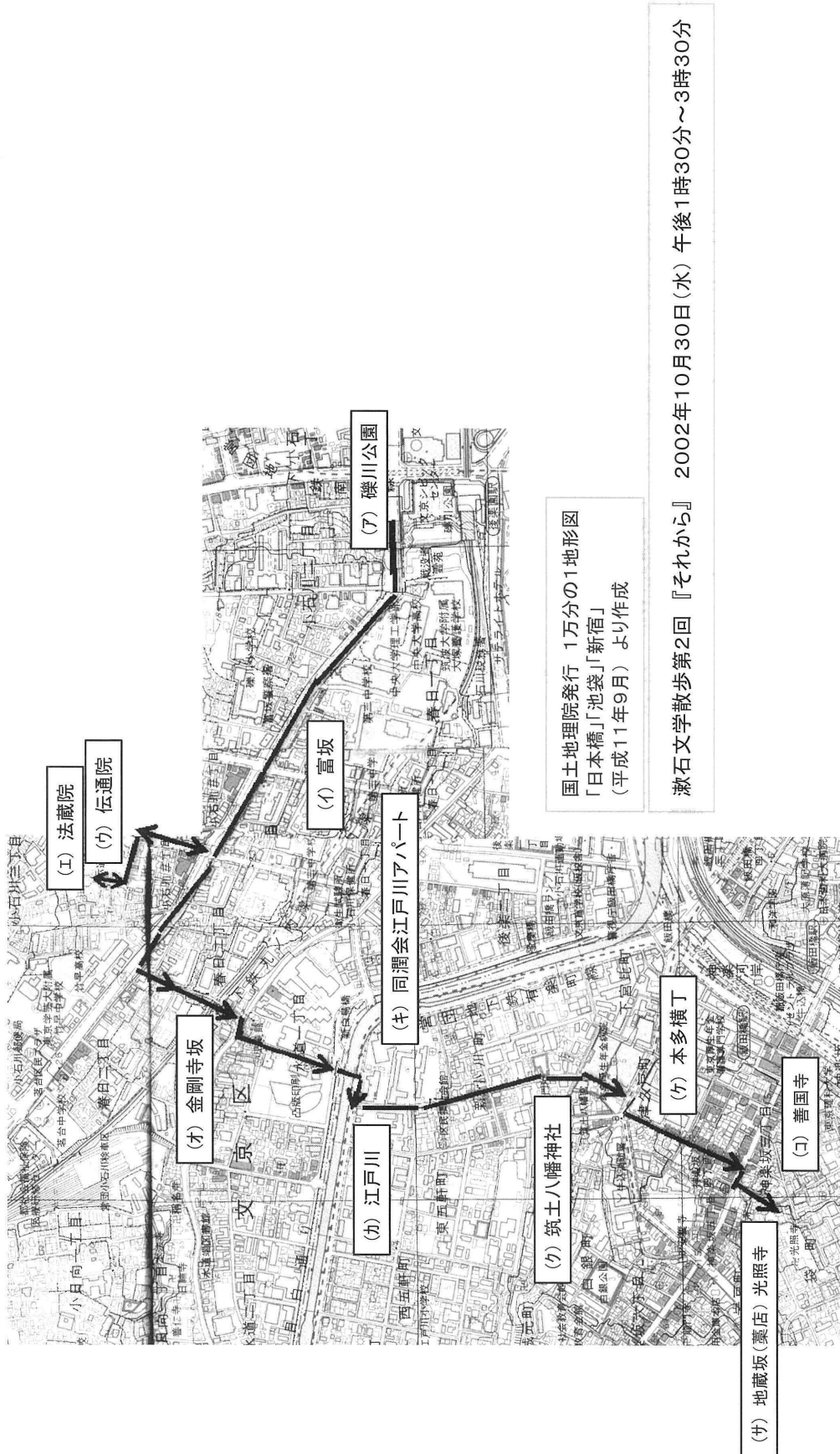
(夏目漱石関係参考文献)

- 『漱石全集』全28巻・別巻 (岩波書店 2002年4月～2004年9月)
『増補改定 漱石研究年表』(荒正人 集英社 1984年6月)
『漱石の東京』(武田勝彦 早稲田大学出版部 1997年)
『漱石の東京2』(武田勝彦 早稲田大学出版部 2000年)
『漱石とその時代』I～V (江藤淳 新潮社 1970年8月～1990年12月)
『漱石の心的世界』(土居健郎 角川書店 1982年11月)
『反転する漱石』(石原千秋 青土社 1999年4月)
『漱石の記号学』(石原千秋 講談社 1997年11月)
『漱石を読みなおす』(小森陽一 筑摩書房 1995年6月)
『新聞記者夏目漱石』(牧村健一郎 平凡社 2005年6月)
「漱石研究2 三四郎」(翰林書房 1994年5月)
「漱石研究6 こころ」(翰林書房 1996年5月)
「漱石研究10 それから」(翰林書房 1998年5月)
「漱石研究11 彼岸過迄」(翰林書房 1998年11月)
「漱石研究15 行人」(翰林書房 2002年10月)
「漱石研究17 門」(翰林書房 2004年10月)
「別冊国文学 夏目漱石必携」(學燈社 1980年2月)
「別冊国文学 夏目漱石必携 II」(學燈社 1982年5月)
「別冊国文学 夏目漱石事典」(學燈社 1990年7月)

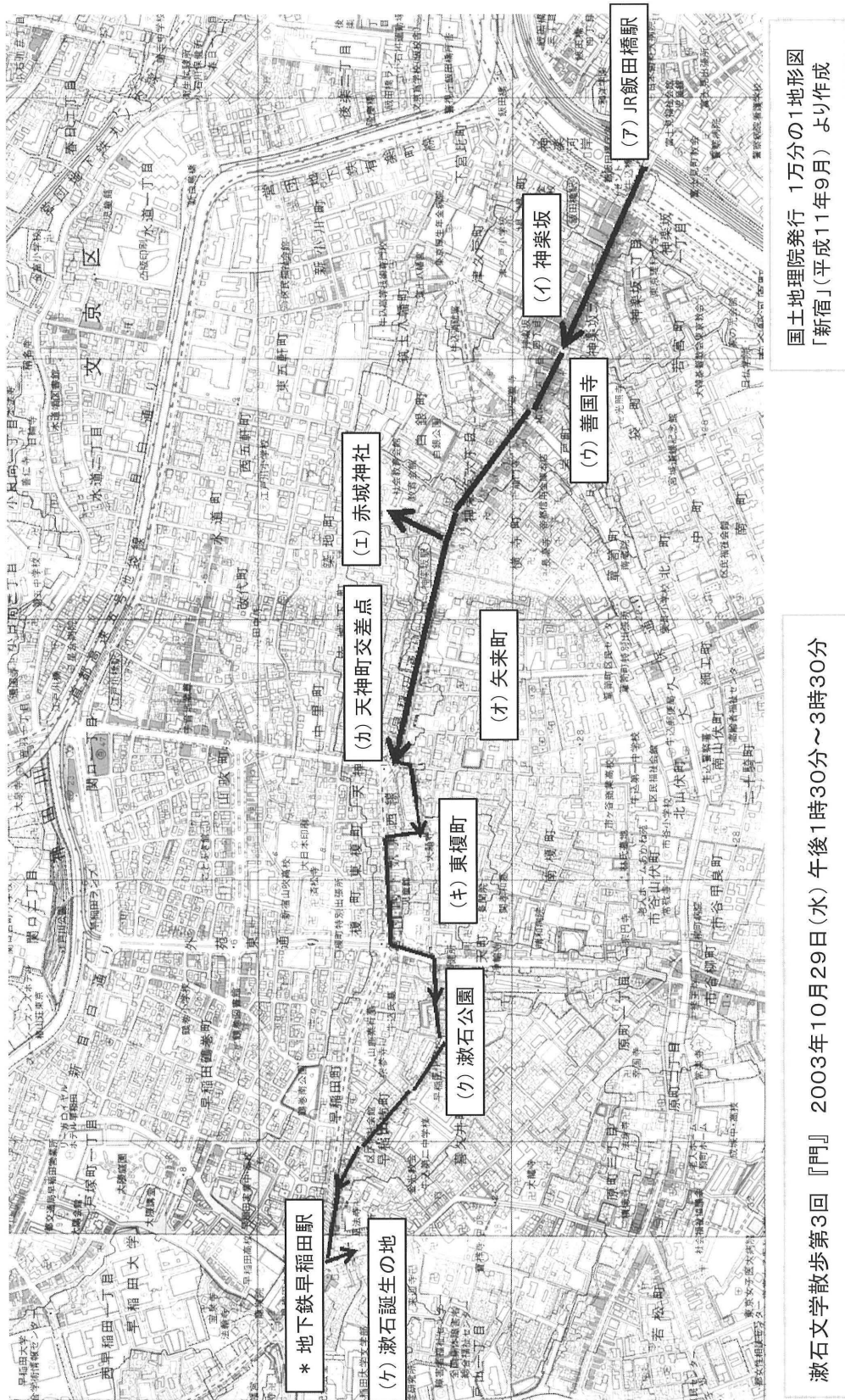


漱石文学散歩第1回 『三郎』 2001年10月31日(水) 午後1時30分～3時30分

【地図1】 漱石文学散歩第1回 『三郎』



【地図2】 漱石文学散歩第2回 『それから』



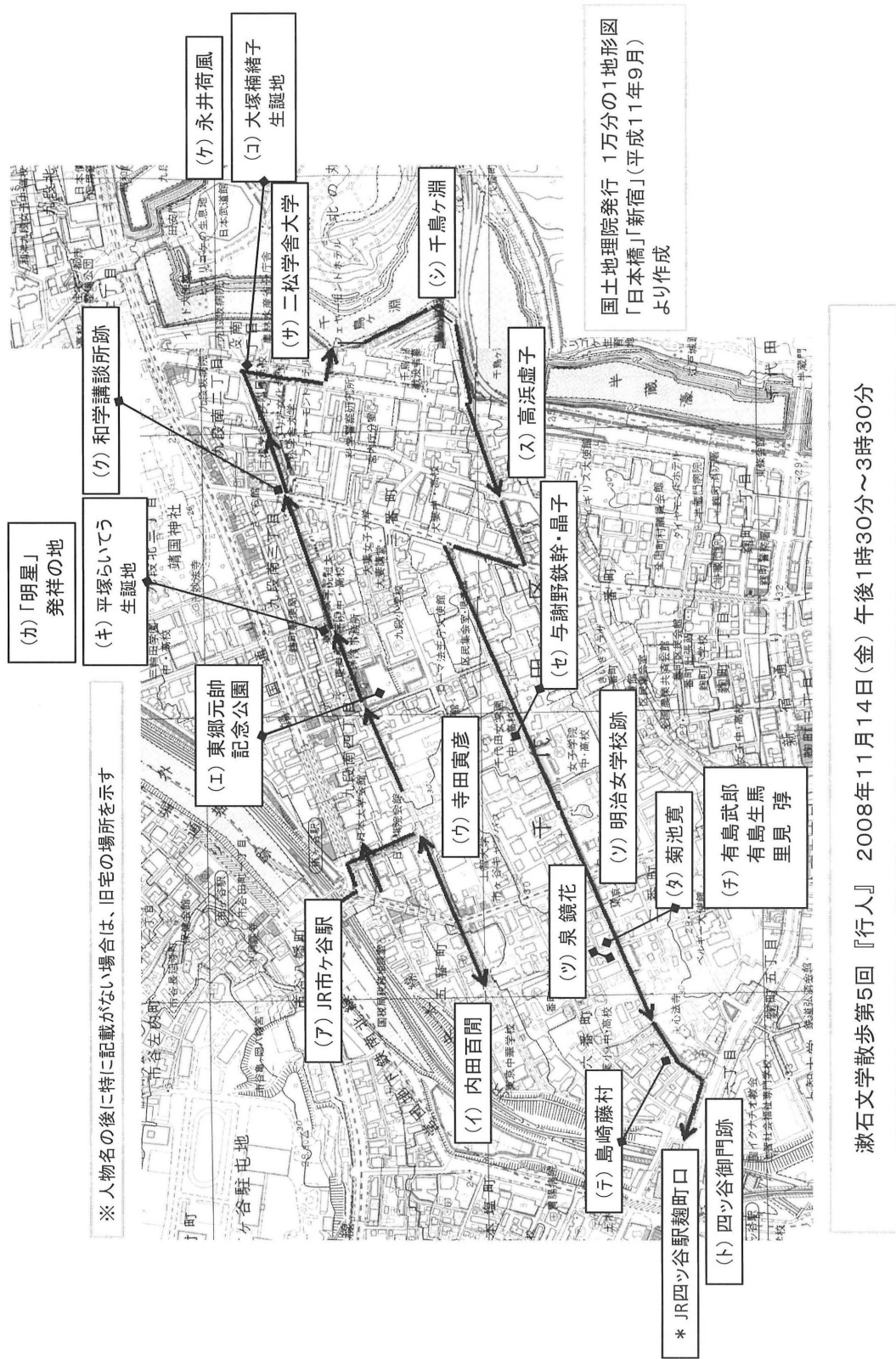
【地図3】 漱石文学散歩第3回 『門』



国土地理院発行 1万分の1地形図「日本橋」(平成11年9月)より作成

漱石文学散歩第4回 『彼岸過迄』 2007年10月19日(金) 午後1時30分～3時30分

【地図4】 漱石文学散歩第4回 『彼岸過迄』



【地図5】 漱石文学散歩第5回 『行人』



漱石文学散歩第6回 『ころ』 2009年11月20日(金) 午後1時30分～3時30分
※雑司ヶ谷霊園にも行ったが、その部分は割愛した。

【地図6】 漱石文学散歩第6回 『ころ』